

504
233

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 $\frac{18}{70}$ 1 2 3 4 5

始



173

504-233



大正
12.11.3
内交

口繪解説

我が歡喜母〔本名ハリーター(Harriet)、鬼子母のこと〕を畫くに、天女の形を作り、極りて美麗ならしめ、身は白紅色とし、天紺寶衣、頭冠、耳環、白螺を鋼となし、種々の瓔珞其身を莊嚴し、寶宣臺に坐して、右足を垂下す。宣臺の兩邊に於て、膝を傍ふて各々二孩子を畫く、其の母の左手は懷中に於て一孩子を抱く、畢哩孕迦(Prinika)と名く、極めて端正ならしめ、右手は乳に近く吉祥菓を掌にす、其左右に於て並に侍女眷屬を畫く。



鬼子母神圖

(東京美術學校藏子繪)

亦に於て並に特文者類も畫く。

——(大藏文書部藏子母神圖)——

亦に其の母の式年以對中に於て一好子を餅く澤田奉獻(Prinika)と
亦且多垂す。宜臺の兩態に於て親を對ふて各々二好子を畫
耳飾、白鬘も賜ふし餅々の要存其後多垂類し宜臺に坐し了
の所を對し親を對れ親を對ふとし其後白鬘也と天佛寶本照殿
亦に其母の式年以對中に於て一好子を餅く澤田奉獻(Prinika)と

口 齋 齋 齋

人家に母ある楽しく、父あるも斯れ亦楽しく。世に沙門ある楽しく、天下に道ある楽し。

—(法句經、象喻品)—

今夫婦を爲る、同じく共に一體なり。

—(佛敎電圖教經)—

子は人の實にして、妻は人生第一の伴侶なり。

—(S.N.1.6.4.)—

自序

一。私は先年ある必要から、佛教聖典に現れたる女性に就て、ひとわたり調べたことがある。その時の感想を忌憚なくいへば、案外につまらなかつたといふ一言で盡さる。しかし、それは、現代の婦人研究に關する具體的な知識を以て、之に對したのと、今一つは、その外景のみを見て、深く彼女達の心持をみるといけなかつた爲に、その古代氣分に厭き、實際問題に觸れることの少いのをものだらなく感じたのであつた。

一。その後、私はこうした態度をすて、もう少し親切に之を考へ、言外の意趣を細くたづねて、この中に婦人問題の原理を發見し、可なりに複雑な苦勞を嘗めた彼等を憶念して、

雜——雜阿含經
中——中阿含經
長——長阿含經
增——增一阿含經

大に教へられたのである。又所謂五障三従とか、變成男子とかいふ不思議な思想も、畢竟時代の情緒であり、女性解放の叫である。と判つてみれば、愈々なつかしく慕はしめられるのである。「妾の養父は古いものを食べておりますから」といへる新妻須摩提女の心持や、「妾の家庭は自由であります」と叫べる菴提遮女の心持などは、到底月並情緒ではなかつたやうである。——こうして、漸くに佛教婦人の真相を捉へたやうであるから、茲に本書を公刊したのである。

一。私は昨春『阿含篇』を公にした時に、佛教聖典を阿含、方等、念佛の三部に分けて、各部に一篇づゝあゝしたものを書くことを讀者に約束しておいた。その時から、婦人に關

するもの丈は、別に編纂する志があつたので、本書はこの意味から、廣く一切の「經」に現れたる女性を紹介せんが爲に、代表的な女性三十餘人を選択して、粗々その言行を録したのである。従て、この中には、阿含部の婦人もあれば、方等部念佛部の婦人もある。

一。阿含部の婦人は凡て歴史的人物であり、方等念佛部の婦人には歴史的人物もあれば、化人もある。また、彼は直にその言行を傳へ、此は時代の謬見を追窮しつゝ、その意中を明にし、佛教の本義を開顯するので、兩者の叙述法に史傳と創作の別あることは深く注意せなければならぬ。——優秀な創作は史傳已上にその眞實を傳へるものである。

一。阿含部には釋尊を取りまいて可なり夥しい婦人が

出る、しかし、細にその言行を録せる者は至つて少く、また同じやうな型の婦人が多いので、本書は専ら色彩の異つたものゝみを集めた。殊に、方等部に現はるゝ婦人は、思想的にみれば、三四種に過ぎないのであるから、尤も興味ある二三を以て代表せしめた。それから、念佛部の婦人で紹介すべき丈の材料のある者は、わづかに韋提希一人である。この女性に就ては、先年『韋提希夫人』と題する小著を出したし、更に詳しいものを書く覺悟であるから、わざと簡單にしておいた。猶、多數の婦人中には、彼此傳説の交錯するものや、異傳なども多く、研究を要するものがあるけれども、もと、本書は佛教婦人の氣質や生活の様相を傳ふることを目的としたのであるから、寧ろ經典の傳ふる所をあるがまゝに

集めた。一切「經」に現れたるいろいろな女性は、もうこの外にはあるまいと思ふ。

一。本書を読む方は、先づ初に附録を読んで下さい、そこに佛教婦人觀の一斑と婦道の原理とを述べておいたから、それから、各篇の註(出據、要點、字解、注意)にも、相當に用意があるから、是非併せて見て下さい。

一。終りに佛教の、この婦人觀に現代の研究を加味して、「佛教婦人」を新しく活かしめてゆく所に、正しい進路が展開するといふことを一言附け加へておく。

編者識
編輯、誓固の書居にて

大正十一年十月三十日(學制頒布五十周年記念の日)

一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
その肉を割きて……………	才媛ペーシヤリ……………	美容術……………	新しい佛教婦人の氣焔(1)……………	未利夫人……………	貞操……………	ヤームブーナダの婚筈……………	貧者の一燈……………	新妻……………	少女の戀……………
一〇五	九六	九三	七三	六三	四七	四〇	三六	二七	一

目次

二	維摩居士と魔界の女	110
三	須福長者の娘	114
三	法志長者の妻	119
四	愛の力	124
五	勝鬘夫人	137
六	韋提希夫人	145
七	七人の娘	155
八	遊女、蓮華	163
九	歎びの歌	165
〇	新家庭	170
一	尼僧の初め	177
二	蓮華色比丘尼	184

三	新しい佛教婦人の氣焔(2)	101
四	夫婦道	107
五	母道	110
六	孝道	113
七	久遠の女性	115
八	玉耶姫	110
九	鬼子母神	117
〇	機織娘	115
一	教團の母	119
二	耶輸陀羅姫	120
三	須鬘女	126
四	代表的婦人	121

三五
三六

婦人の現實暴露……………二六九
ウバグブタと老尼……………二七一

附 録

釋尊の婦人觀……………一

(1) 釋尊と婦人……………一

(2) 男女同格……………一

(3) 男女異相……………一

女性解放の運動……………二

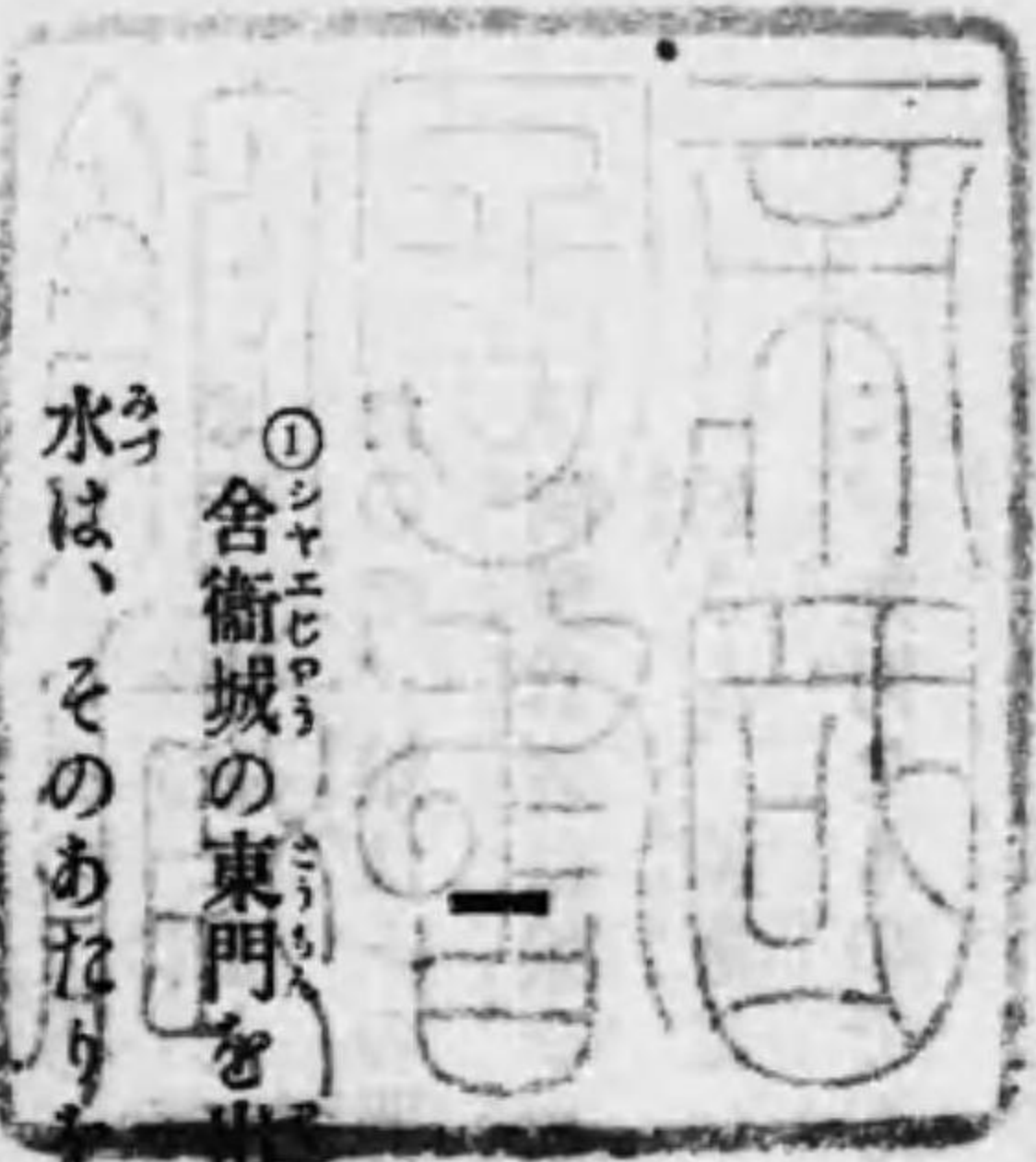
(1) 五障三從の辨……………二

(2) 變成男子……………二

(3) 女人成佛……………二

佛 教 婦 人

安井廣度編



少女の戀

① 舍衛城の東門を出ると、もうそこに ② 祇園の林が見わる、アチラワテ河の水は、そのあたりを緩く流れて、岸に跳る水牛の様も長閑に見わる。

今しも、阿難尊者は舍衛城を出て、もの思はしげに此路を歸つたが、ふと、岸邊にたつて水を汲む美しい娘の姿を見て、何となくその方へすゝみよつた。「姉さん、その水を一杯くれませんか、喉が渇きますから。」娘は若い坊さんから、突然に聲をかけられて、やゝ驚いたが、そのまゝ羞し

そうにさしうつむいた。

暫くして、さも悲しそくに、

「御出家さま、水はこうして澤山に御座いますけれど、妾は卑しい旃陀羅の女ですから、ごうも差しあげることには出来ませぬ。

と、いふのであつた。旃陀羅といふは、牢番や屠殺を業とする穢多非人のことで、出家に對して物をいふは勿論のこと、顔を見るさへ穢れると云はれてゐたので、娘はその罪を恐れて差しひかへたのである。

阿難尊者は娘を慰めて、

「姉さん、遠慮はいりませぬ。……四方の流も海に入れば一つ味ひとなるやうに、如何なものでも、佛門に入れば皆な同じみ佛の子となるのですから、私共の心には、貴いだの賤しいだのといふ別はありません。……さあ、早く下さい。

と、求めた。

娘は心から悦んで、

「妾のやうな者から、水を受けて下さいませぬか。

といつて、恭しく一掬の水を阿難尊者に献じた。阿難尊者は之を飲んで、徐にそこを立ち去つた。

○

初戀の心おかしや、妙齡の彼女は、恍として阿難尊者の後姿を見送り、切なきに、ほつと一息ついた。

「あゝ、何といふ優しい御出家であらう、何といふ綺麗な御方であらう、……あの美しい御顔、あの愛くるしい御眼、あの優しい御口、澄んだ御聲、親切な御言葉、何一つとして妾の情をかきみださんものはない。……あゝ、あんな御方に侍くことが出来たら、どんなにうれしいことであらう……」

彼女は宛もない思ひを抱いて、夢のやうに我家に急ぎ歸つた。

「お母さん、只今歸りました。」

「おまへ、何をそんなに考へてゐるの。」

「どうかしたの。」

「お母さまは阿難尊者を御存知でせう。」

「知つております。」

「あの方は本當にお優しい方ですね、……………」

彼女はとうとうたまりかねて、切ない戀を母親に打ち明けたのである。

「お母さま、どうぞ、妾の思ひを叶へて下さい、お母さまは魔法が上手だからどうぞ、あの方を呼んで、私と一所にして下さい。」

母は娘の話聞いて深く驚いた。

「汝は氣が狂ふたのか、まあよく考へておくれ、阿難さまは釋迦^①如來の御弟

子ではないか、若しその阿難さまを誘ひ出さうものなら、乾度、釋迦如來の熱心な信者である。波斯匿王さまが怒つて、我々一族を廢殺しあそばすにちがひない、……………」

「お母さま、おもひきれよと仰しやるのですか。」

「まあ、おちついて、お母さまの話聞いておくれ……………」。それにね、世間には魔法にかゝらぬものが二つある、一つは死人である、も一つは無欲の人である。釋迦如來の御弟子方は皆な修行を積んで欲心を離れておゐでになるから、到底お母さまの力ではどうすることも出来ませぬ。」

「お母さん、私の願を聞いて下さるのですか、頼りに思ふ汝さへ、そんなに仰しやるのなら、妾はもう一死ぬより外は御座いませぬ。」

一筋に思ひつめた娘の心を解く術もない。

魔法使の婆さんは娘にせまられて、終に魔法を使ふことに決心をした。そこで、先づ、中庭の地へ一面に牛の糞を塗り、その上にうづ高く白茅を布き、四方に入つた水瓶を置き、そして、百八枚の鮮かな妙遇の花を用意したのである。かくの如く、準備は全く出来上つて、火は先づ白茅に點せられた、めらめらと毒蛇の舌の如く、火は積み重ねたる白茅にうつると見る間に、ぱつと恐ろしい火音をたて、茲に世を焼き盡くす地獄の切火も、かくあらむと思ふ大猛火をそこに現したのである。髪を亂したる婆さんは、一心に咒文を誦へながらその火壇を繞り初めた。

「阿磨利、毗磨利、鳩々彌、三磨彌……」

そして、婆さんは一繞りする毎に、手に持った華を一本づつ火の中に投げ、投げては繞り、繞つては投げ、その間々に、

「天よ、魔よ、乾闥婆よ、火の神よ、地の神よ、我が呪文をきよ、我が祭を

うけて、阿難尊者を此處に到らしめたまへ。
と、怨むが如く訴ふるのであつた。

魔法の力か、戀する女の一念が通つたのか、阿難尊者は何となく心が迷ふてふらくと旃陀羅の家に向ふた。

「娘よ、それ、彼方から阿難さまが見ゆる、早く室を掃除して、美しい褥を敷き、花を散し、香をたいて、お迎へをするやうに……」

「お母さん、本當ですか。……本當に見えますわ。」

娘は嬉しさと耻しさに心も空に落ちつかず、そわ／＼しながら、室を淨めて座を飾り、それ／＼に用意して、戀人を待った。

阿難尊者は旃陀羅の家の前に來り、何となく心がひかれて、迎へらるゝまゝに座に就いた。娘は今こそ戀の思ひが叶ふたと喜んで、阿難尊者の手をさう

とした。その時、阿難尊者はふと恐ろしい罪に近づく自分を省みて、ぞつとした。戀か。道か。戀は甘し道は尊し、戀と道との峠にたつて、たゞされて、切なさに悶々苦んだのである。……彼の兩眼からは熱い涙がぼろりとおちた。……彼は此の苦難を免れやうと思ふて、一心に世尊を念じた。その時、釋尊は ⑦ 天眼を以て之を見はし、阿難尊者を感みて ⑧ 一偈を唱へ給ふた。

⑨ 戒の池、清涼にして

能く衆生の煩熱を拂ふ

智者この池に入らば

無明の障盡きむ。

まよひに戒は

⑩ 諸佛一乗の道なれば

この道に入りし我なれば
禍を彼は逃れむ。
阿難尊者は世界の神力に守られて、危うくも此難を逃れ、無事に祇園精舎へ還ることが出来たのである。
後には、もう婆さんの咒文も力なく、娘はたゞ失望して、よゝと泣くばかりであつた。

○

翌くる日、彼女は朝早く起きて、新衣を着け、花鬘を戴き、美しい瓔珞を纏ふて、たゞひとり、ふら／＼と精舎の方へ出てあつた。
やがて時が来て、阿難尊者は ⑪ 托鉢に出られた。彼女は其の御姿を見るや歡びに堪へず、ヒタ走りに走つてその傍によりそひ、燈火を慕ふ胡蝶のやうに、その後を追ふた、阿難が止れば止り、阿難が歩めば歩み、どこまでも／＼、戀

しい影をみつめてついてゆく人前もあらばこそ、彼女はもう戀に狂ふてゐるのである。阿難尊者はその有様を見て、恐ろしくなり、急いで精舎へ還つた。

「世尊よ、女はこうして狂人のやうについて参ります、どうしたならば、宜しう御座いませう。」

「阿難よ、そんなに愁惱することは無い今に此問題を解決してあげやうから。こういつて、娘の方に向ひて、

「娘よ、汝はこの人の妻になりたいのか。」

と、お尋ねなされた。

娘は點頭いた。

「娘よ、凡て婚姻には親の許諾を受けねばならぬが、汝は親の許諾を受けてゐますか。」

「親はもう承知してゐるので御座います。」

「それならば、こゝへ親を呼んでおいで。」

暫くして、魔法使ひの婆さんは娘につれられて、釋尊の御許に詣でた。

「汝がこの娘の親か。」

「はい左様で御座います。」

「汝は實際この娘を阿難に與れるつもりか。」

「はい、左様で御座います。」

「娘よ、しからは、汝の願を叶へてあげやうが、阿難の妻となるには、その綺麗な俗服をぬぎすて、出家とならねばなりません。」

「まことに有難い御計で御座います。」

「こうして、忽にふさぐとした黒髪は剃りおとされて、法衣姿の若い尼が生れた。」

その時、釋尊はいと嚴肅に仰せられるやうは、

「尼よ、汝は阿難の何を愛するか。」

「世尊よ、妾は、阿難さまの眼を愛します、妾は阿難さまの鼻を愛します、口を愛します。耳を愛します、聲を愛します、行歩を愛します。」

「尼よ、心靜に自分の教を聞かねばならぬ。尼よ、汝の愛してゐる阿難の眼の中には汚ない涙があるではないか、鼻の中には涕があり、口の中には唾があり、耳には垢があり、身體中には不淨が充ち満ちてゐるのではないか。たゞ阿難の外貌をのみ見て、儂ない戀を貪つてはならぬ。尼よ、眞實の道を探ねて、道に生かよ。」

斯くして、懇ろに ⑫ 五欲の過を示し、 ⑬ 四つの眞理を教へ給ふと、彼女の意は次第ノノに開けて、遂に第一の證りを得たのである。その時、釋尊はこう仰せられた。

「あゝ、阿難には相應しい良い妻が出来た、さあ起つて阿難の所へ往くがよい。彼女は仰せを承つて、慚愧の汗をしばつた。」

「世尊よ、妾は儂ない夢を見ておりました、妾は愚癡ゆへに阿難さまの後を逐ひました、思ひかわしてみますと、穴へ入りたいやうな氣持が致します。……しかし、御蔭で戀から道に入り、肉の愛から法の愛へ、うるはしく情を淨めることが出来て、かやうな幸福は御座いません。」

こうして、年若き娘は、本性 ⑭ 比丘尼として新生涯に入つたのである。

因に、阿難は猶この問題に就て苦んだやうである。對手の娘は、偽りなき懺悔をして、殊勝な尼となつたけれども、彼の意はこう鮮には解けなかつたので、「一向多聞にして道力を全うせず」とは、彼のやるせない心の痛みであつたのである。そこで釋尊はこの苦しむ阿難を對告衆として、波斯匿王等のため

に、また「首楞嚴經」を説き給ふたのである。首楞嚴とは「男らしい」といふ梵語で、内外の悪魔に破壊されぬ勇者の姿を意味するのである。又、その時、釋尊は、旃陀羅の娘の出家入團を怪しめる人々に對して「四姓平等」の教を説き給ふたのである。

〔出處〕 摩訶伽經。

舍頭諫太子二十八宿經。

佛說摩訶女經。

首楞嚴經。

〔要點〕 この御經には二つの要點がある。(一)人種問題に就て。釋尊は既に人種の差別を排し、吾我憍慢の心を誡め、最下級の旃陀羅族の女をも教團に入れ、佛の子として遇し給ふたのである。(二)戀愛問題に就て。一篇の主意は靜に戀愛をみつめ、之を淨化する所に床しい法愛の生るゝことを示すので、特に盲目的な戀愛を戒めたやうである。私共凡人は到底この比丘尼のやうに解脱の境界に入ることは出来ないけれども、せめては愛の

流れを程よく人道の河底に導き、愛の淨化に努めたものである。釋尊は戀愛寧ろ性欲退治の方法として、多くの場合、人體の不淨觀をすゝめられた。その當時としては尤も適當な方法であつたのである。凡て不淨觀に限らず或一事に專注することは、確に性欲退治の好き方法である。

〔字解〕①大體に於て、釋尊の傳道區域は恒河(ガンガス河)の流域であつた。舍衛城は河北コーサラ國の首府である。

②もと、コーサラ國の祇陀太子所有の王國であつた。城内の須達長者は之を買收して、こゝに宏壯な精舎を建て、教團に寄進した。所謂祇園精舎である(拙著「阿含經」二七四頁参照)。

③釋尊の侍者、情の温やかな美男子で、また多聞第一の譽を得た御弟子である。尊者は佛弟子に對する敬稱。

④釋迦は種族の名。如來は宗教的真理(如)を體檢(來)したる人。即ち、釋迦種族から出た所の如來といふ意味。

⑤コーサラ國の王。

⑥ 音楽の神

⑦ 天眼通のこと

⑧ 梵音ガートハ、詩のこと

⑨ 佛教徒の守るべき戒律

⑩ 過去の佛も、現在未來の佛も、皆な同じやうに戒を守つて證りを開き給ふたのであるが、戒は諸佛一貫の乘(道)といはる。

⑪ 物を乞はして歩くこと。出家の行者は在家の信者から施物をうけ、在家は出家から宗教上の話を聞いて、相互生活をしてゐたのである。

⑫ 色、聲、香、味、觸(ふれるもの)に對する卑しい欲望。

⑬ 苦みさ、苦を集め起す原因と、滅と、滅に到る道に關する真理、之を苦集滅道の「四聖諦」といふ。聖諦は神聖なる真理といふこと。

⑭ 釋尊の御弟子に、四種ある、出家の男を比丘といひ、女を比丘尼といひ、在家の男を優婆塞といひ、女を優婆夷といふ。

⑮ 博聞強記。

⑯ 佛教の教團に入ること。

⑰ 婆羅門族(僧族)、クシヤトリヤ族(王族士族)、ベーシヤ族(庶民)、スードラ族(奴隸)

二 新 妻

① 釋尊が舍衛城附近の祇園精舎に在した時のことである。

ある日、滿富城の滿財長者は、商用があつて、舍衛城に遊び、須達長者の家を訪れた。長者には修摩提といふ美しい妙齡の娘があつた、善く兩親に仕へて甲斐なくしく働き、心からこの遠來の客をもてなすのであつた。彼はその氣立の優しい行儀の正しい風を見て、大に感じ、窃に自分の倅の嫁にもらうと念ふた。

「須達さん、あの方は御宅のお嬢さんですか。

「そうです。

「優しい好いお嬢さんですね。」

「いや、随分我儘ものですよ。」

「須達さん、甚だ突然ですが、宅の忤の嫁に、……おもらひすることは叶はんでせうか。」

「さあ……まあ篤と考へまして。」

「家柄や財産がつりやはんでせうね。」

「いや、そういふ譯ではありません、汝の家と宅とは、家柄といひ財産といひそのほか萬事が相應して、まことに良い縁だと思ふております。しかし、結婚は、お互に重大事件ですからね。」

「どうぞ、何でもかまわずに云つて下さい。」

「満財さん、實はね、娘は熱心な佛教信者ですから、汝達と信仰が違ひますから、その點を案ずるのであります。」

「須達さん、御話は御尤です、しかし、それはどうにでもなりませう。私共は私共の神さまを祀りませうし、お嬢さんはお嬢さんで釋尊に御仕へなされば宜しいではありませぬか。決して信仰の自由を束縛するやうなことは致しませんから。」

「須達長者は多少氣惑ふた。どんな良縁でも、信仰の相異のために慘ましい問題の起ることは、世間にありがちのことであるから。」

そこで、長者は暫く座をはづして、釋尊の御許に詣でた

「世尊よ、満富城の満財長者が遊びに参りまして、頻りに娘をくれいと申しまするが、いかいなもので御座いませうか、異教徒の間にうら若い女を手放しするのには、私としても何となう氣がかりで御座います。」

その時、釋尊は其話を聞いて、こう仰せられた。

「長者よ、若し修摩提女が彼處へ適くことゝなれば、屹度、多數の人々を救ふ

であらう。

○ 長者はほい釋尊の意中を知ることが出来たので、直に辭して家に歸つた。そして、手厚く彼を款待し、吉日を選んで婚筵を擧げることになり交した。

○ さて、いよいよ婚禮の日が来た。滿財長者は萬乘の車にそれ／＼用具を乗せ、多數の家人を將つて、華々しく定め町の町に向ふた。須達長者もまた寶車を用意して、種々な道具や寶物を積み、須摩提女を連れて、華々しく出かけた。そして、定め場所でおちあひ、迎へられて、滿富城に趣いたのである。沿道は到る處人垣をなして、皆なもの珍らしげに笑ひさいめくのであつた。

○ 當時、この城では他國の者と婚姻することを禁じ、若し其禁を犯した者があれば、六千の婆羅門を招いて供養せねばならのであつた。又、その日には

婆羅門に賭肉と賭肉の羹と重釀の酒とを供へ、婆羅門は皆な右の肩に白氈か毳衣の衣を着け、半身を露して其席に出るのが例になつておつた。長者は豫て承知のことであるから、充分にその用意をして、多數の婆羅門を招待した。やがて、長老の婆羅門は彼等を引率して長老の家に來た。そして、一人／＼に、「お芽出たう」を申して、長者の頂を一抱き抱いては席についた。座は定つた。

○ その時、彼は花嫁姿の修摩提にいふやうには、「嫁よ、彼處にお居る婆羅門達は、皆な私共の御師匠であるから、そのつもりで、丁寧な挨拶をしてお出で。

彼女が申すやうは、
「父さん、妾はあんな 儼形外道には挨拶をすることが出来ませぬ。
「嫁よ、あれは儼形ではない、法服を着けておいでるのである。」

「父さん、あの人は人達は慚愧を知らないのでせうか。身體が半分已上も露出てゐるではありませんか。何のために法服を着けてゐるのでせうか。……父さん、世尊は妾共にも慚愧の道を教へられました、慚愧の心があつてこそ、尊卑高下の別もあれ、若しこの心がなければ、全く雞や犬や猪や羊や驢とかわりがありませんか……父さん、妾はいかにしても、あゝいふ畜生のやうな人々を禮拜することは出来ませんから、どうぞ勸辨して下さい。」

その時、彼女の夫は聞き答めて、

「婦よ、氣儘なことを申してはならぬ、あの人は皆な私共の御師匠であるから、私共の奉へてゐる神さまであるから、是非に挨拶をせねばなりません。」

「夫よ、どうぞ、さういふて下さるな、妾は人間で御座います、人間が驢や犬に御禮が出来ませうか。」

「無禮を申すな。」

約束にそむいて、長者親子は頻りに彼女に禮拜を強いるのであつた。彼女は楽しい今日の歡びも忘れて、ひたすらに、長者や夫の無理解なことを怨めしく思ふた。彼女は泣きくづれながら、國元の両親や親族を念じて獨り訴へた、「父さん母さん、たとひ打擲かれて髪や形が毀れても身を刻れて死んでも、妾は決してあんな人を拜みませんから……」

その時、婆羅門達はそれと察して、

「満財さん、そんな婢の對手をするよりか、早く私共を供養して下さい。」

と、口々に罵るのであつた。そこで、長者親子は、已むなく彼女を捨て、婆羅門達をあしらひ、いろ／＼な供養を献げた。

彼等は供養を受けて後、ひとしきり饒舌りたて、それ／＼辭し去つた。

さて、彼等が歸つた後、満財長者は高樓に雜沓をさけて、獨り靜にその日の

不始末を考へた。「あゝ誤つた。あんな強情な女を嫁つて、忤もさぞ心苦しう思ふてゐやう、……こんな風だと、將來、家を破るやうな事があらうも知れぬが困つたことぢや……」

翌くる日、彼が平素歸依する修跋といふ婆羅門は、長い間、長者に會はなかつたことを憶ひ出して、突然に彼を訪ねて來た。

「満財さん、久しぶりですね、何ぞ變つたことがありますか、たいへんに、御心配のやうですね。」

「修跋さん、實は近頃忤に嫁をもらひましてね、昨日は大勢の婆羅門達を御招待して披露の宴を開きました。ところが、その嫁が恐ろしく頑固で、どうしても挨拶に出ないので、挨拶に出ないばかりか、いろ／＼と婆羅門達の悪口を申しますので、全く赤面致しました。」

「どちらから、おもらひでしたか。」

「舍衛城の須達長者の娘ですよ。」

婆羅門は大に驚いて。

「それはでかしましたね。あの須達といふは有名な奉佛家で、あの家へ出入する出家は、皆な立派な人ばかりですよ、嫁御も多分篤信であられませうね。」

「卿は妙なことをいひますね。どうして異教者をお譽めなさいますか。あのお釋迦さまには、何か特別な御徳があるのですか。」

「そうです、なか／＼偉いお方です。私は已前、お釋迦さまの孫弟子にあたる均頭といふ人にあひましたが、非常に優れたお方でした。均頭さんでさへそうですから、お釋迦さまはもちろん、御弟子方の神徳は格別でありませう。」

「そつういふ尊い御方ですか。それではどうぞして御請待申したいものですね。長者の意はいくらか開けて來たのである。修跋は懇に須摩提女と相談して釋尊を御請待申すやうに説き勧めた。」

長者は須摩提女の室をたづねた。

「嫁よ、私は只今修跋婆羅門から汝の師匠の御徳を聞いて、御供養申したい心になりましたから、そなた、一つ取計うてくれませんか。」

彼女は思ひも受けぬ父の話を聞いて、うれし泣きに泣いた。

「父さん、承知いたしました、どうぞ御用意をあそばして下さい、佛さまは、明日屹度御出でになりましやうから。」

「嫁よ、私は請待の法を知りませんから、汝自身で御請待申しておくれ。」

その時、須摩提女は身體を淨めて、高樓に上り香を焼き花を捧げ、一心に掌を合せて、祇園精舎の方に向ひ、

みほとけの

恵みはふかし

あるときは鬼子母を降し

あるときは凶賊を救ひ給ひぬ。」

みほとけの

恵みはふかし

あるときは王舎城にて暴象を降し

あるときは馬提國にて悪龍を伏し給ひぬ。」

いま、わが眷属は

世尊を見奉らむことを願ふ

願くは哀愍を垂れて

明日 我等の供養を受けさせ給へ。」

と。歌ひ了るや、彼女が捧ぐる香爐の煙は、雲のやうに搖曳して、玄かに祇園精舎の空に流れ、いろくの妙華は、時ならぬに雨のごとく降つて、祇園の林をかざつた。

阿難尊者は、この光景を見て、驚いて釋尊の御許へ詣でた。

「世尊よ、之は何の瑞相で御座いませうか。」

「阿難よ、之は先頃滿富城へ嫁つた佛の使須摩提女が、我々を請待せんがために現した瑞相である。であるから、汝は今から鐘を鳴して大衆を集め、明日各自に神通を現して彼處へ行くやうに傳へて下さい。」

阿難尊者は御弟子達を集めて、世尊の命を傳へた。

曉天の空は美しく彩られて、朝鳥の歌は快げに今日の集會をことほぐやうに見わた。長者の家では、一同に早く身仕度をし、用意をすまして、高樓に聖者

達の來訪を待つのであつた。

暫くすると、一人の修行者が雲を排して大空に現れ、大きな釜を背負ふて來るのが見わた。一同は皆な驚いて其方をみつめた。

「嫁よ、彼方から、髪長い白衣を著た一人の修行者が大釜を背負ふて見わたが、あの方が汝の御師匠か。」

「父さん、あの方は御師匠ではなく、乾茶と申す御師匠の御使であります。」

乾茶は三度城を遠つて、長者の家に入つた。

「嫁よ、また彼方から、美しい蓮華に乗つた一人の修行者が見わた、あの方が汝の御師匠か。」

「いゝね、あの方は修跋婆羅門から御話がありました、舍利弗尊者のお弟子均頭さまで御座います。」

均頭も三度城を遠つて、長者の家に入つた。

「それ、あの夥しい青い牛を御れて来る御方は。」

「あの方は、耆闍崛山で千人の修行者を感化せられたといふ、有名な槃特尊者で御座います。」

「それ、あの澤山な美しい孔雀をつれて来る御方は。」

「あの方は、持戒第一の羅睺羅尊者で御座います。」

かやうに、多数の聖者達は、或は猛々しい金翅鳥に乗り、或は七頭の龍に乗り、或は純白の鵠に乗り、或は虎に乗り、或は獅子に乗り、或は寶馬に乗り、或は六牙の白い象に乗り、或は琉璃の山に坐して、それ、神通を現し、疾風のやうに大空をきつて、長者の家に向ふたのである。彼女は問はるゝまゝに一々その名を紹介し、その徳をたゞへ奉つた。

やがて時が到ると、釋尊は大衣を着けて地上を去ること七仞程の高さに現れ給ふた、右には憍陳如が起ち、左には舍利弗が立ち、阿難は拂子を持つて後

にひかへておる。又、婆娑世界を司る梵天王は天の神々と共に來つて御身を衛り、五百人の乾闥婆王は、百千の音楽を奏で、御前に進み、數知れぬ天女は妙華を降らし、妙香を灑いで、御前に舞ひ初めた。仰げば、世尊の御相好は巍々として寶山の如く、眉間の白毫からは光明を放つて四方を照し給ふのである。

「嫁よ、あの御方は日の神さまか、それとも汝の御師匠か、光明障曜として御姿を拜むことが出来ませぬ。」

「父さん、あの御方が私共の御師匠であります、日の神さまよりもつとく勝れた力を持つておられます。どうぞ、一心に供養して福德を受けて下さい。」

釋尊は大衆に迎へられて長者の家に入り給ふた。滿富城の長者は居士や外道や市民は、雲のやうに彼の家に集つた。

その時、須摩提女は世尊の御前に出て、悲喜の涙にくれながら申すやうは、
 「世尊よ、妾は異教徒の家に來て、朝夕理解のない家人から、異教に仕へるや
 うに勘められるのであります。しかし、妾はごうしても、そういふ心持にはな
 れませぬ。……世尊よ、たとひ兩親から雙眼をぬかれるやうな苦みを受けて
 も、こよういふ家には來てはならんのでしたに何の惡縁あつて、こゝへ嫁いたの
 でせうか。妾は今籠の鳥のやうにまゝならん日を送つておるのであります。ど
 うぞ、妾の疑結を解いて下さい。」

釋尊は彼女の訴へを聞いて、こよう仰せられた。

「須摩提女よ、もう少しおちついて考へれば、道が開けるであらう。汝は決して
 惡縁があつて此家に來たのではなく、寧ろ大きな使命を持つて此家に來たの
 である。汝は、先づ自分の信念を明にすると共に、廣く縁ある人々を救はねば
 ならんのである。世間の人をして、汝を見ること、摩尼寶珠を見るがごとくあ

らしめねばならんではないか。執著の心をすて、憍怖な心を養へ、道は自然
 に開けて來るのである。

彼女は釋尊のみ教を聞いて、信念を明にすることが出來、大きな希望に勇
 みたつたのである。

やがて、用意の饗應は運れて、釋尊を初め御弟子方は彼等の手厚い供養を受
 け給ふた。

饗應の後、釋尊は御禮の法話を遊ばされた。長者の一族を初め、多數の城
 民は、釋尊の御教を聞いて、在家の信徒となつた。

〔出據〕 增二二、須陀品三。

佛說給孤獨長者女得度因緣經。

須摩提女經。

佛陀三摩竭經。

〔要點〕 この話をこゝへ出したのは、結婚問題に就て、婦人方の願慮を顧ひたいと思ふたからで深く味へば、可なり種々な問題に觸れる。(一)婚約に就て、今までのやうに、殆んど當事者の人格を認めず、親の一存に依て事を運びゆくのは、全く間違つた考である。しかし年少にして未だ分別の足らぬ當事者を主とするのも、特に所謂自由結婚は甚だ危険であるのである。此點に於て、私は須達の態度をうれしく思ふ、即ち、當世者と親との外に、親族知友は勿論、更に自ら私淑する人、かゝる問題に充分理解ある人に懇談すれば、最も眞實に近い道にすゝむことが出来やうと思ふ。(二)佛教婦人といへば、往々素直な温順一方の女性の様に思はれてゐるけれども、決してそういふものではない、本篇の須摩提女の如き、妾は人間で御座ります云々と叫ぶあたりは、可なりにめざめた心持であらう。又、釋尊の教を聞いて歡びを新にして進む所など、信仰なくてはわからの強味である。(三)慚愧の道を勧め寶珠のやうな女性を説き、執着を誠めて儚泊な心を教へ給へるなど、最も心すべき點である。

〔字解〕①佛教の開祖、釋迦種族から出た聖人(原語、牟尼)であるから、釋迦牟尼と呼ばれる、略

して釋尊と呼ばれる。

②釋尊に對する敬稱、世間から尊敬せられる人といふ意味。御弟子は多く世尊くと呼んだ。

③四姓の一、婆羅門教を奉ずる僧侶の階級をいふ。

④佛教以外のいろ／＼な道、概括して婆羅門教と呼ばれてゐる、その中の一派。

⑤「鬼子母神」参照。

⑥師匠の妻の横暴から、話がつれて千人殺を初め、九百九十九人を殺して、千人目に釋尊を害せんとした時、釋尊に救はれた凶賊チークツマール。

⑦戒律を守ること。羅睺羅は釋尊の實子である。

⑧三衣の一。出家は普通下衣と上衣を着け、折々大衣を纏ふ。

⑨此の世のこと。娑婆は梵語、堪忍の義。

⑩當時の最高神の名。

⑪兩眉の間にある白玉の細い毛。

⑫疑は心の一つのむすびれである。

⑬摩尼は梵音マニ、無垢離垢の義、寶珠の名。

⑭釋尊は供養を受け給ふた時は、いつも御禮の法話をせられた。

〔注意〕 御經には折々不思議な神通の話が出る、そのまゝに信するも可し。また象徴的にその意を味ふも可し、本經の神通談は釋尊等の來訪の神々しさを寫せしもの歟、或は釋尊等を懷念することによつて、曇りし彼女の心が開け、更に一族を感化したることを描きしもの歟。

三 貧者の一燈

釋尊が①王舎城の耆闍崛山に在した時である、ある日、②阿闍世王は釋尊を屈請して飯食を供養した。釋尊はその供養をうけてから祇園精舎へお歸りあらせられた。その時、王は耆婆大臣に相談をするやうは、

「耆婆よ、今日は佛陀を御請待して、心ばかりの供養を獻げた。佛陀も快く私の供養をうけて下された。が、此上もつとく功德を積むには、どうしたな

らば宜しいであらうか。

耆婆は答へた。

「大王よ、それならば、たくさんの燈をお供へなさるが宜しい。

そこで、王は勅して、百斛の麻の油膏を用意せしめ、宮門から祇園精舎まで數知れの燈をともすことゝした。

そのころ、この城に一人の貧しい老媪がゐた。彼は前頃から一度佛陀を供養したいと思ひながら、貧乏で資財を持たぬために供養することが出来ないでゐたのである。しかるに、その日、たま〜阿闍世王が萬燈を供へて、どうも功德を積むといふ話を聞いて、大に感激し、何とかして、せめて一本の燈でも獻げたいと念ひ、ふらく〜と城へ物乞に出たのである。彼は漸く貳錢の金を得たから、それを持って油屋へ出かけた。

「油屋さん、どうぞ、これ丈油を下さい。」

油屋の主人は媼の哀れな姿を見て驚いた。

「お婆さん、わづかな油を買ふてどうなさるのか、それよりは何ぞ食物を買つた方が宜しからう。」

その時、媼はこう答へるのであつた。

「油屋さん、佛さまが此世にお出ましになることは、^④百劫の間に一度しかないそうであります。しかるに、妾は今幸に佛さまの御世に生れ出ることが出来ました。けれども、貧乏に生れて資財を持たないために、何一つ御供養を申すことが出来ず、まことに残念でなりません。殊に、今日は王様の萬燈供養の話聞いて、妾の心は一層切ないのであります。それで、せめて一本の燈でも供へて、後の世の世もどでにしたいと思ふのであります。」

油屋は媼の一心に動かれて、貳錢で二合賣るところを三合まして、五合與へたのである。媼は之を持つて直に佛の所に詣で、一本の燈の献けた。しかし

考へてみると、これだけの油では漸く半夜しか燃わないのである、そこで、恭しく跪いて「若し妾が後の世に佛と同じ證りを得ることが眞實であるならば、どうぞ、この燈も消ねやうに通夜もつて欲しいものである」と、こう誓ふのであつた。

さて、不思議なことには、阿闍世王が献げた數多い燈は、或は風のために消え、或は油が盡きて消え、さすがに、係りの番人を困らせたのであるが、貧女の一燈のみは、通夜消えず、他の燈にもましてよく燃わたるのである。

翌くる朝、媼は再び佛の所に詣でた。そして、自分の一燈が猶さかんに燃わてゐるのを見て、すこぶる奇異の念を起した。

その時、釋尊は目連尊者に仰せられるやうは、

「目連よ、もう夜が曉けたから、萬燈を消して下さい。」

目連尊者は仰せを受けて、次第に萬燈を消し初めた。しかるに、阿闍世王が

供へた數多い燈は、皆なすぐに消れたけれども、媼の一燈ばかりは、一たび、二たび、三たび消しても容易に消えないのである、^⑥袈裟を以て扇ぐと、反て益々明るくなり、神通力を以て捲風を起して消さうとすると、いよ／＼さかんに燃わあがるのである。そして、この異様の光は上は梵天の世界を照し、廣く大千世界を照破するのであつた。

人々は驚きの眼をみはつた。

目連尊者は頻りに吹き消さうとあせつてゐる。

その時、釋尊は仰せられた。

「目連よ、止めなさい。この燈は當來佛になるべき人の光明であつて、この光明は到底汝の力では消すことは出來ないのである。この貧女は宿世に百八十億の佛陀を供養して、すでに前の佛から成佛^⑦の豫言を受けてゐるのである。たゞその後、専ら布教傳道に力を盡して^⑧布施をする暇がなかつた爲に、かや

うな貧しい生活をしてゐるけれども、この後さらに、三十劫が間功德を積みば功德が成就して、須彌燈光如來といふ佛に成るのである。その世界には日月を要しない、人民は皆な身から大光明を放つて照し合ひ、まるで^⑨切利天のやうな光景を現はすのである。

その時、媼はこの豫言を聞いて大に歡び、ふわりと大空に昇^⑩り、また地上に下つて、佛陀を禮拜して家に歸つた。

その時、阿闍世王は不審さうな貌をして、耆婆にこう尋ねるのであつた。

「耆婆よ、世尊はどうして、たくさんな燈を献けた私を顧みないで、あの漸く一本の燈を供へた計りの老媼に成佛の豫言を與へ給ふたのであらうか。

耆婆は判然と答へた。

「大王よ、卿はたくさんな燈を供へられたけれども、精神が純一でなかつたからして、成佛の豫言を受けることが出來ませなんだ。又、あの媼はわづかに

一灯を献げた計りであるけれども、精神が純一でありましたから、成佛の豫言を受けたのであります。

○
その後、阿闍世王はまた盛な「華供養」を催したことがある。しかし、その時も王の供養は失敗に終つて、反つて、わづかな華を供へた或る園丁が成佛の豫言を受けたのである。しかし、王は耆婆大臣の懇切な教に依り、終に供養の眞精神に徹底することが出来、至心に佛陀を供養して、成佛の豫言を受けたのである。

〔出據〕 阿闍世王授決經。

賢愚經卷三。

〔要點〕 佛典にはしばしば「眞實の誓」が出てゐる。眞實の誓（原語、*anāci Kiriyā*）といふは、この事が眞實なればかうなれといふこと、不思議にそうなるといふ事をいふので、眞實の誓

威至誠の力を表す内性の祈りである。いかに大きな事でも、至誠がなければダメである。又、いかに小さいことでも、眞實には不滅の光が輝く、眞實には天地を動かす、鬼神を泣かしむる力があるのである。

〔字解〕①恒河の南、マガダ國の首府。

②マガダ國の王。

③梵音アツドハ、覺めたる人といふ意味、如來と同じ。

④劫は梵語劫波の略、長い時をいふ、御經には種々な譬を以て一切の驚くべき長さを説くその百倍である。

⑤眞實の誓をいふ。

⑥出家の衣、チレンツ色。

⑦將來、何年かの後に佛のさとりを開くといふ豫言、こうした豫言はその人の眞實が指し示すのである。

⑧廣く財を施し（財施）勞力を惜まず（力施）教へて倦まぬこと（法施）、今は財施をいふ。

⑨天上一の。

⑩佛典にしばし出づ、大空に昇るは歡び——感激の情を表し、大地に下るは謙虛——靜かな心地を表すが如し。

⑪功德を積むと、供養をするとかは、多くの場合功利的に行はる。供養の眞精神は功利的な考をすて、純一に生きやうとする眞實でなければならぬ。

〔注意〕(一)百劫の間にたゞ一度しか佛陀の出世がないといふは、情熱に満ちた言葉である。

(二)この編は舊世に百八十億の佛陀を供養して云々。この事は佛教を理解せぬ人々には異様に聞ゆるのである。佛教徒は三世の因果を信認するので、三世の因果を觀する已上そこに前生の福德の話や、修行の話も出やうし、來世に關する種々な豫言も出て來やう百八十億とか、三十劫とか須彌燈光來とか、そういう表現に囚はれないで、説話の眞精神を汲まればならぬ。

四 ヤームブリーナダの婚筵

ヤームブリーナダに一人の篤信な男があつた。彼は婚禮の前の日、頻りに佛陀

を憶念して、婚筵に列り給はんことを希ふのであつた。たまく、佛陀は彼の家の前を過ぎ給ひ、彼の願ひを知つて、その請を納れ、多數の御弟子と共に彼の家に入らせ給ふた。主人は大に歡んで、充分に御一行を款待した。やがて、親族朋友も打ち揃ふて席についた。佛陀は多數の客人が机に向ふていろ／＼と興する有様を見て歡びながら、こう仰せられた。

「人間が感ずる所の最も大きな幸福は、婚姻に依て二人の愛情を結ぶことである、併かし、これよりも優れた最大の幸福は「正法」(正道)に契合する事であつて、死は夫婦の間を割くけれども、決して正法に嫁せるものを奪ふことは出來ないのである。

それだから、汝等は正法に嫁して、之と共に神聖な偕老の契を結べよ。夫がその妻を愛し永劫の愛に生きやうと願ふならば、正法そのものに對するやうに妻に對して信であらねばならぬ、かやうにすれば、必ずや妻は夫を信じて之を

敬ひ、また快く奉へるであらう。又、妻がその夫を愛し永劫の愛に生きやうと願ふならば、正法そのものに對するやうに、また夫に對して信であらねばならぬ、かやうにすれば、必ずや夫は妻を信じて之を敬ひ、また補助を加へるであらう。自分は今汝等に告げる、かくしてこそ、婚姻は初めて神聖であり幸福であるのである、従て、兒等もまた父母の徳を學んで、家庭の和樂は益々深めらるゝのである。

獨り棲むこと勿れ。各人をして神聖な愛を以て正法に嫁せしめよ、破壊者である惡魔は、汝等の肉身を分離せしめるけれども、猶、汝等二人は同一正法のうちに棲むのである、正法は不生不滅であるから、汝等もまた永遠の生命を分ち得るのである。

客人もまた之を聞いて心に力を得、信仰生活の妙味を認めないものはなかつた。かくして、彼等は三寶に歸依をした。

【出處】 マウル、ケーラス氏の「佛陀の福音」第八十一。
 【要點】 須達長者の娘の嫁入話などから推察すれば、釋尊も折々は結婚問題に關係なされたらしむ、ケーラス氏のこの話は善くその意を傳へたやうである。更に、大乘佛教は、家庭を道場とするからして、愈々その意味を明白ならしめる。(但し、この通りの記事は見當らない)。

五 貞 操

王舎城に厲氏といふ長者があつた。臨終の際に、長男の佛大を枕邊に呼んで「兄よ、お父さんが亡くなつた後は、どうぞ、弟の僧大を立派に育てあげて、兄弟仲よく暮しておくれ、それに就ては、何よりも佛の戒を守らなければ一身が危いから、佛戒を守るやうにつとめておくれ。」

と遺言し、程なく彼は死んだのである。

○

さて、弟の僧大は成人して後、求道の念深く、たび／＼兄の所へ来て出家せんことを願ふた。兄はそれを、妻が欲しい謎だと思ひ込んで、弟のために良縁を求め、遂に某長者の娘快見といふを納れて弟に娶すこととした。

やがて、婚禮の日となつた。親族を初め、多数の賓客は佛大に招かれて、祝の宴に列つた。その時、彼は弟を顧みて、戯いながら、

「汝は、やはり出家をする氣か。」

と尋ねて見た。弟はいと眞面目に、

「兄さん、出家は私の宿願です。」

と答へた。

彼は笑ひながら、

「そんなに熱心なら出家をしてはどうか。」

と勸めてみると、弟は歎んで之に應ずるのである。

彼も力及ばずして、終に弟の意に任することとした。僧大は兄の許可を得て、その日、直になつかしい我家を捨て、山に入つた。そして、然るべき師匠もがなと、諸處方々を尋ね回つて、漸く一人の若い修行者にあうた。彼は歎んで、その人の前に跪いて、先づ出家の動機をきくと、修行者はこう答へるのであつた。

「友よ、色欲はご恐しいものはありません。丁度炬火を捧げて風に逆ふてゆく時、火焰の燃わあがらない間に地上に置かなければ、忽にその手を焼くやうに又、大きな鷹に追はるゝ鳥は衝へてゐる其肉を置いてなければ、自ら彼の餌食となるやうに、又、兒が蜜を塗つた刀を舐めて舌を截るやうに、餓れた狗が枯骨を咬んで口中を傷めるやうに、色を好ぬ人は、賢人を遠けて愚人に親み、自ら身を亡して未來亦地獄に墮ちるのであります。友よ、私は此問題にめざめて出家をしたので、さて出家して佛戒を守つてみると、いつも清々しい心を持つこ

とが出来て、何の災患もないのであります。
僧大は若い修行者の熱心な告白に感動されて、それから半季ばかり、この人の教をうけ、更に深山に入つて獨り修行をつづけました。

○

いちらしいのは彼の妻である。嫁いだのはほんの名ばかりであるけれど、一旦夫と定めたからには、今さら親里へ還る心もなく、たゞ獨り空聞を守つて、且暮夫の安否をのみ氣遣ふのであつた。

日は一日／＼と過ぎた、佛大の心は何時となしに美しい彼女の上に注がれるやうになつた。ある日、彼は積る思ひを琴に寄せて、こう歌ふた。

煌々たる鸞金の花

野に開く

手折らずば

いまに朽ちむ。

生々しき君の容よ

華かな君の姿よ

君を見て

我魂迷ふ。

快見も琴をひきよせた。

みほどけの

みのりはふかし

そを慕ふ夫の心ぞ

とほに戀しき。

たとひわれ

身は寸分にならうとまよふ

わがこゝろ
二君に事へじ。

彼はまた歌ふ。

君をおもふ心は久し

いかにして君を迎んかど

我は久しく惨みぬ。

いま君を見て

我心 怡ぶ

我がまこと涙み給へや。

快見また歌ふ。

みほとけは

禮儀の道を説き給ふ

叔妻は子にして

聳伯は父ならずや

いがてわれ

兄君の御言聽かんや。」

彼はさらに歌ふ。

美しの君よ

君の容色は輝く

天か下の美し女も

君には及はじ

我心狂ひぬ

いでともに情に酔はむ。

快見また歌ふ。

兄君よ、許させ給へ

この身は骨と革とに

穢き血と肉とを盛れるのみ

うつろひやすき

我身に迷はで

變らぬ道を念じ給へや。

○

さて、佛大は戀に破れて、恐ろしいことを企み初みた。彼は窃に酒家に入つて無頼漢をかり集め、財寶を興へ、旨をふくめて弟を殺さしめることゝした。ある晩、彼等は僧大の所へ行つた。

①「沙門よ、疾く出てまいれ。

僧大は多數の無頼漢の集るのを見て驚いた。

「皆さん、夜ふけてこの山奥へ何の御用で見えましたか。こゝには水と火と麩蜜とより差しあげるものはありませぬ。

「沙門よ、汝の首をもらいに來たのだ。

「皆さん、何故に世を捨てた沙門の、私の首を求め給ふのか。私は道を修めてからまだ日が浅く、何の證りもさとりぬ哀れな修行者ですから、どうぞ命だけは許して下さい。

「外に用事はないのだ。

「皆さん、暫く待つて下さい、私は王舎城の長者佛大といふものゝ弟で、家は巨萬の財がありますから、今手紙を認めますから、どうぞ兄の所へ行つて下さい。

「うろたへるな。その兄が汝の首を求めてゐるのだ。彼は其話を聞いて深く驚いた。それと察して、泣きながらいふやうは、

「皆さん、よく聞かしてくれました。私は先頃ある師匠から色欲の恐ろしいことを聞いたが、今こうなるのも全くその爲であります。婦人關係のいきさつであります。しかし、どうぞ一年だけ待つて下さい、その間に佛の道を證らうと思ひますから。」

彼等は僧大の語に耳をまかさず、早や、刀を閃していきりたつ。

「それではどうぞ、即ぐ殺さないで、先づ脾から……」

言の終らぬ間に、あわれ、左の脾は血汐を飛して地上に轉んだ。

その時、天の神は空中に現れて彼を勵すやうは

「修行者よ、恐るゝことなかれ——、堅く心を持って——。」

彼はその聲を聞いて、

「神よ、願くは、私の難を師匠に告げたまへ、

と、一心に祈るのであつた。

僧大の師匠は神の報を聞いて、忽に神通力を以て彼の前に現れた。
 「友よ、忍びたまへ。——須彌の山もいつかは壊れ、大海の水もいつかは盡きる、一度惟嵐の風が吹けば、山も海も凡ては皆な滅びてしまうのである。——どうぞ、渺たる小軀に執着しないで、たい一心に佛を念じて下さい。
 師匠の語が終ると共に、彼は第一の證を聞いたのである。そして賊が右の脾を断つ時に、第二の證を開き、左の手を断つ時に、第三の證を開いて生死自在の境に入つたのである。

その時、彼は賊に命じて樹の皮を取らしめ、枝を筆として血汐に浸し、兄のために一片の遺書を認めた。

「大兄よ、慈親の遺訓に背き、色欲に迷ふて、遂に骨肉を傷ひ給ひぬ、不孝といふべし、不仁といふべし、我は今兄の刃に罹りて、永へに解脱の境に遊ばむ。たい願くば、力を盡して正しき道を崇め給へ。」

と書き終ると共に、またも右の手は地上に落ちた、彼はまた頸を伸して、
 「汝等は決して私の首を泥に汚してはならぬ。若し泥に汚すやうなことがあれば、自ら罪をうけて地獄に墮ちねばならぬ。」
 と、懇に賊を誡めた。そして、圓に第四の證を得て、心しづかに兇刀に斃れたのである。

○

さて、彼等は僧大の言を守つて、丁重に遺骸を佛大の所へ運び歸つた。佛大は多數の金銀を興へて手厚く彼等を遇し、首を遺骸に著け、衣を被せ、杖と鉢と屣とを傍において、巧に病人のやうに取りつくろひ、快見の室に行つて、
 「汝のすきなお婿さんが歸つて来たから、奥の間へ御出で、
 と、白々しく誘ふのであつた。

彼女は佛大の語を聞いて、直に奥の間へかけつけた、しかし、當の夫は目を

閉ぢて静坐してゐるから、道を念じ給ふことゝ思ひ、わざとひかへて挨拶を止め自分の室に歸つて御餐の用意をし、心もそらに、
 ②坐禪から覺め給ふ時を待つのであつた。しかるに、日中が過ぎても坐禪から起ち給ふ様子が見われないから、待ちくたびれて、再び夫の傍へ食事の知らせに行つたのである。一度、二度三度ばかり丁寧挨拶をしたけれども、もとより死人のことであるから、何の應へもあらう筈がない、彼女はそれと察して、驚いて、夫の衣を牽くと、忽ち頭に地に墮ち、遺骸は分散して、まことに目もあてられぬ様である。——嗚呼、我夫は、我が戀しき夫は、自分ゆへに傷くも殺され給ひしか。……と、彼女は床の上に打ち仆れて、軋々悲泣し、血を啗いて、そのまゝ殉死したのである。

佛大は物音に驚いて室へ来てみると、弟の遺骸は四方に分散狼籍し、美しい女は血汐にまみれて、遺骸を抱いて仆れてゐるのである。さすがに、彼もこの

惨しい光景を見ては自分の罪に戦慄せざるをわなんだのである。一旦の情欲に眼が眩んで、清い美しい夫婦を殺害したことの恐ろしさよ……。彼は弟の遺書を讀みつゝ、苦み、悶へ、恨み、泣き、遺書を手に持ったまゝ、また悶死したのである。

○ この悲劇は忽に世間に知れわたつた。國王と人民はその清徳を聞いて、厚く彼等二人を葬つた。

快見を弔へる時の人の歌に、

戒行清きこと空の如く

心動かざること地の如く

貞操正しく

行高きこと天の如し。

世にあるの日は

諸天たゞへ

世を去れば

諸天迎へて

その魂は常世を驅くる。

須臾の苦を忍びて

盡き難き天上の榮を得たる

美しき女かな。

〔出據〕 佛説佛大僧大經。

〔要點〕 この話は貞操と色欲の恐るべきことを説く。貞操に就ては再縁おしほく、議せらるゝ

やうだ、しかし、議論は多くの場合辨護になるので、我々は快見の覺悟を以て始終すれば宜しい筈である、子女の教養等もその念力に依て徹するであらう。再縁はともかくに

慚づかしいことだ。

〔字解〕①梵音シユラマナ、勤息の義、善を勤め惡を息むること。出家して道を修むる人をかく呼ぶ。

②左の趾を右の股の上におき、右の趾を左の股の上において、靜に佛法を默想すること。出家の日課である。——快見が夫の死を知らず、坐禪中のやうに思ふたのは、決してつくりごこではなく、或種の禪に入る時は死人さかわらぬやうに見ゆるのであるから、快見がそう見たのは、寧ろ情趣深し。

〔注意〕僧大が受難の際に、天の聲と師の勤めを聞いたのは、彼の内心の聲を象徴したのであらう。

六 末利夫人

波斯匿王の妃、末利夫人は、釋尊が初めて舍衛城の祇園精舎へ御出になつた時に、佛教に歸依せられたので、それ己來、一生王の精神的指導者として、内

助に力を盡くされた。容貌は至つて醜い方であつたけれども、非常な才女で、そのうへ厚信であつたために、深く王の愛敬を受けられた。二三の傳説を集めて見れば、

ある時、十七人の比丘が阿耨羅婆提河へ水浴に來て、いろ／＼に面白く遊び戯れたことがある。或者は流のまゝに泳ぐ、或者は流に逆ふて泳ぐ、或者は水面に出る、水底に沈む、或者は水に書をかく、流を澆く、そして、折々どつとかケ聲をあげて笑ひさいめくのであつた。

その時、波斯匿王は高樓からその不作法な有様を見て、心うく思はれ、傍にゐた末利夫人を顧みて、

「汝はあの裸ン坊を信心するのか。
どからかはれた。」

夫人は彼方を一瞥して、静に申さるやうは。

「大王さま、あの人達は皆な出家して間のない青年の比丘であるから、まだ本當に出家の戒がわかつてゐないので御座いませう。それとも、長老が愚癡で監督が届かないためにあゝした不作法を致すので御座いませう。しかし、兎も角も、青春の身を以て、佛の道を修めやうといふのは、非常に尊いことでは御座いませぬか。また、人の心は電光のやうなもので、一念發起すれば、刹那の間に無明の惑を破るので御座いますから、無雜作に、他人の過を咎めてはなりませぬ。又、大王のやうに御齡をめした方でも自ら得る所がなければ、決して他人を審く資格はないので御座いますから。」

そして、窃に使を世尊の許に遣して、彼等の不作法な戯れを御注進申しあげられた。

釋尊は、このために、「水中戯の學處」を御制定あそばされた。

二

或時、波利といふ商人が王宮へ来て、波斯匿王に珍らしい香璽を献上した。

そこで、王は後宮三千の夫人を集めて、最も優れた女にその香璽を與へやうと思ひたゝれた。やがて、數多の夫人はそれ〴〵花のやうに美しく、月のやうに清く装を凝して、大廣間に集つた。

然るに、末利夫人は丁度その日(十五日)が齋戒日に當つてゐるので、素服をつけたまゝ、遠慮して内宮に引き籠つておられた。王は恐ろしく不機嫌で、三度まで使を以て、夫人に出るやうに申しつけられた。夫人は己むことを得ず素服のまゝで大廣間に出られた。しかも、彼女の飾らぬ相は綺羅びやかな夫人達の間、一際めだつて美しく清く輝いてみるのであつた。

三千の夫人は顔色なく、王は悚然として驚きの眼をみはつた。

「末利よ、汝はどうして、そんなに崇高く美しいのであるか。」

「大王さま、妾は罪の深い障の多い淺間しい女で御座います、妾は但だみ佛の教を信じて、齋戒を持つて、漸くしのいでおるので御座います。」

大王はその優にやさしい心地に感じて、夫人に香璽を與へられた。

「大王さま、妾は齋戒中で、かやうなものを着けることは出来ませぬから、どうぞ、他の御方にかけて下さい。」

「末利よ、私は一番優れた女に之を與へやうと思ふて、汝を選んだのであるから、若し汝か受けて呉れなければ、このまゝ宮殿に飾つておくことに致しませう。」

「大王さま、そういふ御思召でしたなら、これから一緒に世尊の所へ詣つて、あの徳の高い世尊に献けて、み教を承らうでは御座いませんか。」

大王は大に歡んで、直に末利夫人と共に釋尊の所へ詣られた。

釋尊は、波斯匿王から件の香璽を受けて、懇に「戒香」の華の香にもまして

尊き所以を教へ給ふた。

三

ある時、大王は戯れながら、末利夫人に對して、

「汝は誰が一番好きですか、

と尋ねられた。すると、夫人はいと眞面目に、

「妾は妾自身が一番好きで御座います、

と答へた。そして、王の顔をのぞきながら、

「卿は誰が一番好きですか、

と問ふた。王は少しゆきつまつた、一息のんで、

「末利よ、そういへば、私もやはり私自身が一番可愛いわね、
こういつて苦笑せられた。」

四

又、ある時、こんな話があつた。

「末利よ、瞿曇は不思議なことをいはれるね、愛の生ずる時に苦みが起ると

「大王さま、それは不思議でも何でもありませんね、その通りで御座いますよ。

「汝は瞿曇の御弟子だからさういふのであらう。

王はやゝ不機嫌に見わた。

そこで、夫人は直に使を世尊の許へ遣つて御意見を伺はしめた……。

「大王さま、世尊のお思召を伺ひましたから、御話申しませうか。

「説明をしておくれ。

「大王さま、汝は瑠璃王子を御寵愛あそはすでせう。

「大に愛する。

「それでは、若し王子の身邊に不慮の災難が起ればどうなさいますか。

「それは心配するね

「大王さま、之でおわかりでせう、愛の在る所には苦みが在るので御座います
「汝はまた伊羅王子を御寵愛でせう。薩羅陀夫人も、そして、妾も御寵愛下さ
るでせう。

「大に愛します。

「それでは、若し伊羅王子や私共に不幸が起れば、どうないますか。

「困るね。

「大王さま、之でおわかりでせう、愛の生ずる時に、苦みが起るので御座いま
す。

五

ある時、大王は宮中に夢を解く公卿や大臣や道士婆羅門を集めて、こう仰せ
られた。

「諸卿よ、朕は昨晚妙な夢を見てね、……(夢省略)……何となう氣にかゝる

が、この中に誰ぞ夢を解いてくれるものはなからうか。

或る婆羅門は申しあげた。

「大王よ、私はその夢を解きます、しかし、善い夢では御座いませんから、御遠慮を申しませう。」

「婆羅門よ、遠慮は要らんぞ。」

「然らば、申しあげますが、之は實に不祥な夢で、大王を初め御一族滅亡の豫兆で御座います。」

「何ぞ申すか。……何ぞ穰ふ道はあるまいか。」

「大王よ、それには、太子様を初め、重なる御夫人や侍従や大臣を殺し、一切の臥具や寶物を焼いて、天を祭るより外に道はありませぬ。」

「王は不興の態で便殿に入られた。そして、靜に齋室に籠つておらるゝと、そこへ末利夫人が見わた。」

「大王さま、何ぞ御心配で御座いまするか。行き届かぬことでも御座いましたか。」

「何も汝に過があるのではありません。しかし、私の意中をいへば、汝までが心配をするから、まあ云はぬことせやう。」

「大王さま、妾は卿の半身で御座います。若し萬一の事があれば、一身を挺して卿をおたすけせねばなりません、決して怖れはしませんから、どうぞ聞かせて下さい。」

「王は夫人の誠意に動されて委細に物語つた。」

夫人は其夢を聞いて、王の迷信をさとし、釋尊の所へ往くやうに勧められたやがて、王は佛の所へ詣でた。佛は件の夢を面目く道徳的に解説せられた。

〔出處〕四分律第十六。

法句譬喻經。

S. 3. 18. Udana 6.

中阿含卷六十。

增一阿含卷五十一。

〔要點〕 どの話にも、未利夫人のわちついた覺悟が輝く。「自ら得る所なきものは他人を審く資格なし」といふ妻は妾自身が一番好きだといふ言葉は、餘程深い信念がなくては出ない言葉である。又「妾は卿の半身ですといふは、夫婦一體の自覺をあらはすので、夫人には常に純な愛が動いてゐたのだ。佛教婦人の好典型といふべし。

〔字解〕①毎月八、十四、十五、廿三、廿九、三十の六日に八齋戒を持つて身心を修める、修養テ
1. 八齋戒とは、一に殺さず、二には盗まず、三に姦淫せず、四に妄語せず、五に酒を飲まず（已上を五戒といふ。）六に高廣の床を用ひず、七に花鬘・瓔珞を著けず、八に歌舞戲樂を習はざること。

②釋尊は幼名を悉達多(シツダルタ)といひ、實名を瞿曇(ガウタマ)といふた。成道の後、佛弟子達は世尊を如來といふ敬稱を用ひたけれど、他の一般の人々は「沙門の瞿曇」と呼んだのである。

七 新しき佛教婦人の氣焰 (一)

— 無畏 總 題 —

釋尊が王舎城の耆闍崛山に在した時である。

ある日、舍利弗、大目犍連、大迦葉、須菩提、富樓那、離波多、阿濕卑、優波離、羅喉羅、阿難等の聲聞達は、朝早く城へ托鉢に出て、阿闍世王の宮殿に行き、王の前に默然として列り立つた。

その時、阿闍世王に無畏徳といふ端正比ひなき、十二歳の王女があつた。父の王は堂閣の上のぞみ、金寶の履物を著いて、その座席についたが、無畏徳姫は此等の聲聞達を見ても、起ちもせず、迎へもせず、禮もせず、語りもせず、座席をすら譲らず、たい默然としておつた。王は之を見て彼女に申すやうは。「この方々は皆な釋迦如來の上足の御弟子で、一切の人類を惑むかたために、こ

うして毎日托鉢をあそばすのである。それなのに汝はなせ、起ちもせず、迎へもせず、禮もせず、語りもせず、座席を譲ることすらせんのであるか。無畏徳姫は、之に答へるやう。

「父王よ、汝のお言葉は解しかねます。世界統一の帝王である轉輪聖王は他の小王を引見した時に、起つて迎へるでせうか。又、百獸の王である師子は野干を見た時に、起つて迎へるでせうか。又、帝釋天王は餘の天を迎へるでせうか。大梵天王は餘の天を迎へるでせうか。大海の神は河や池の神を迎へるでせうか。須彌山王は餘の小さい山を迎へるでせうか。日の神、月の神は螢火を迎へるでせうか。」

「そういふことはない。」

「父王よ、それと同じく、大慈悲、大善根によつて佛の道に進む。大乘の菩薩は、小慈悲、小善根によつて阿羅漢を求める小乗の聲聞を迎へないのであり

ます。父王よ、世尊が入滅なされた後でも、斯様な聲聞達には、禮拜する必要がないのに、況して、今現に世尊が在ます時に、どうして斯様な聲聞達を敬ふことが出来ませうか。なせなれば、聲聞に親み近く者は、自然に聲聞の心を發し、縁覺に親み近く者は、自然に縁覺の心を發し、菩薩に親み近く者は、自然に菩薩の心を發することになるからであります。そして、次の偈を唱へた。

廣い海に入つて

僅に一文の錢を取るやうに

多くの聲聞達は

正法の海に入りながら

大乘の寶を捨て、

狭劣い心で

漸く小乗の瓦礫を拾ふ。

また、王の許に親しく出入をしながら
僅に一銭の金を乞ふ人のやうに
多くの聲聞達は
眞の解脱を求めずして
小さい涅槃に満足してゐる。

多くの聲聞達が

一身の救ひに満足して

他を顧みないのは

ちやうど、庸醫が自分のみを癒すやうなもので

多くの菩薩達が

自分を救ひ

他を救ふのは

ちやうど、名醫が醫術に熟達して

多くの人を療治するやうなものである。」

諸々の小さい山に上つたさて

美しい金色の身體とはなれぬ

しかし、須彌の靈山に昇ると

誰でも一様に金色の身體となるやうに

菩薩が此世に在ますから

一切の人類は平等に解脱して

完全な智慧を具へるのである。

まことに聲聞と菩薩とのへだたりは

華に宿る露と大雨と

香のない躑躅の華と香のすぐれた葡萄の華と

小さい船と大きな舶と

驢馬と龍象と

星と満月と

日光と螢の光と

野干の聲と師子の號ほごに

それほごに異ふのである。

○

「それは汝の慢心といふものであらう、なせに、お弟子方をお迎へせんのか。

「いわ、父王こそ慢心しておられます。父王はなせに城内の貧しい人達をお迎

へにならぬのですか。

「それは身分が違ふからね。

「父王よ、菩薩からみれば、此等の聲聞や縁覺は全く身分が違ふのであります

「それでも菩薩方は一切の人類を禮敬ひ給ふといふではないか。

「それは、憍慢や瞋恨の強い人達を導いて、佛に向ふ心を起さしめ、すべての

善の根本を培かかせんがために、一切の人類を禮敬し給ふのであります。然る

に、この聲聞達には憍慢や瞋恨の心はないし、また、自分の信念に固定して向

上するといふ志がないから、そうした人を禮敬する必要はないであります

父王よ、雨が降つても、瓶の水が満ちておれば少量の水も入らぬやうに、この

聲聞達の心には何の教も入らぬのであります。

阿闍世王は彼女の氣焔を聞いて、言ふすべを知らなかつた。

○

その時、舍利弗は心に思ふやう、「この王女は滔々として大に辯するが、果して決定した信念を持つてゐるかどうか、ひとつ試してみやうと、斯くして、王女に問ふやうは、

「汝は聲聞の教に依りますか。」

「いね。」

「汝は縁覺の教に依りますか。」

「いね。」

「汝は菩薩の道に依りますか。」

「いね。」

「然らば、汝はどういふ道に依てかやうに自由に辯せらるゝのか。」

「尊者よ、何かの道に依つたなら、斯様に自由なことは言へるものでありません、妾は何の道にも依つてゐないからして、斯様に自由に辯するのであります。」

それはそうと、汝は⑤三乗の別をお認めになりますか。

「いや、さういふ譯ではありません、眞理は平等の⑥一相であるから、従て⑩無相であります。」

「無相であるなら、何も求める所がないではありませんか。」

「王女よ、諸佛の法と凡夫の法とは、どういふ區別がありますか。」

「空と寂靜とにどういふ區別がありますか。」

「何の區別もありません。」

「空と寂靜とに何の區別もないやうに、⑪諸佛の法と凡夫の法にも優劣の區別はないのであります。」

○

その時、大目犍連は彼女に問を發した。

「汝は、佛の法と聲聞の法とに何かの別を見てござるから、我々聲聞を迎へな

いのでせう。

「尊者よ、汝達は禪定に入らなければ、わからないことが澤山にあるでせう。」

「しかし、佛はそうではありません、平生の心のまゝ、すべての事を御存知であります。又、汝達は禪定に入つてもわからないことが澤山にあるのでせう。」

「しかし、佛はそうではありません、佛は完全な智慧を具へ給ふのであります、又、汝は神通第一の御弟子ですが香象世界のことを御存知ですか、そこへ神通で行くことが出来ますか。」

「私は初めて其名を聞きましたが、到底私の力では行くことは出来ません。一體、その國を司る佛といふは、何といふお名の佛ですか。」

「その佛は放香光明佛と申します。」

「どうしたならば、その佛を拜むことが出来ませうか。」

その時、無畏德姫は威儀を正すことなく、座つたまへ誓ふやうは、「菩薩は初めて發心した時ですら聲聞や緣覺に勝るのでありますから、どうぞ、私の願力によつて、御姿を現し、この聲聞達に香象世界を見せて下さるやうに」と、語り了るや、忽に放香光明佛は、身から光を放つて其座に現れ、聲聞達をして香象世界を見せしめ給ふた。そして、彼女の説を證明し、「菩薩は初發心の時ですら聲聞や緣覺に勝るのであると説き給ふた。」

その時、座にあつた彌勒菩薩は、この佛語を聞いて、香象世界の樹木から妙へなる薫りの起るわけを尋ねた。佛は全く無畏德姫の眞實の誓から、この奇瑞が現れたのであると教へ給ふた。

彼女は目連を追窮した。

「尊者よ、この奇瑞を見ながら、猶小乗の心に住して一身の救済にのみかへは

るやうならば、よく／＼善根が微弱といはなければなりません、いかなるものでも、此事を見れば、善提の心を起すのであります。時に、汝はこの世界はどれ程の距離にあると思ひますか。

「わかりませぬ。」

「尊者よ、汝の神通では何年かゝつても去きつくことは難いしでせう。それほどに遠い／＼所にあります。」

無畏徳姫か斯様に話した時に、佛は神光を攝められ、之と共に、香象世界と佛のお姿とは、忽然として消れ失せた。

○
こゝに於て迦葉は無畏徳姫に言ふやう。

「汝は、曾て香象世界とその佛を見たことがありますか。」

「尊者よ、そも／＼佛は見る事が出来るものでせうか。釋尊の教によると、

肉體を以て佛を認めたり、音聲を以て佛を認めたりするのは邪道であります。もと佛の體は法身でありますから、見聞すべきものではなく、到底知見することは出来ぬのであります。たい信の證によつて佛を想ふ時に、その眞實が示現するのであります。……

「斯様に、それからそれへと、迦葉に對して辨してゐると、次にまた須菩提が口をはさんだ。彼女は一々その問に答へて、最後にかういつた。

「尊者よ。大乘の菩薩には八種の行(略)があるので、之に依れば、僧侶とか俗人とかいふ區別はないので、どのやうな威儀で以て、佛の道に隨ふても、少しも障りにならないのであります。」

○
その時、また羅喉羅は口を開いた。

「汝の今の言葉は不淨で胃潰といふものだ、自分は立派な履物をはいて高座に

座りながら、しかもこの聲聞達とこのやうなことを論議するのは以ての外でありませぬ。

尊者よ、汝は清淨とか不淨とかいふことを御存知ですか。そもくこの世間は清淨でせうか不淨でせうか。

勿論、清淨でも不淨でもない。

「そうでせう。……大體、大乘の菩薩は草の上にも、高座にゐるよりも尊いのであります、小乗の人々が最高の梵天におるよりも尊いのであります。」

「それはどういふ意味ですか。」

尊者よ、釋尊はどこで正覺を開かれましたか。

菩提樹の下、草の座席でありました。

釋尊は粗末な草座に在したけれども、一切の神々は慇懃に禮拜を致されたでせう、座席の高下などによつて、その者の眞價を定めることは出来ぬのでありませぬ。

ます。

その時、阿闍世王は無畏德姫を誡めていふやう。

「汝は、この方か釋迦如來の御子で、持戒第一の御弟子であることを知らないのか。」

「父王よ、左様なことは申して下さるな。勿論、この方は如來の御子でありませぬ。しかし、師子の王は野干を生むでせうか。」

「左様なことはない。」

「父王よ、轉輪聖王は他の小王を敬禮するでせうか。」

「左様なことはない。」

「父王よ、如來は師子の王であり、聲聞達は野干であります、それであるから若し實義によれば、菩薩こそ眞の如來の子でありませう。そもく、佛に子が

あるとかないか言ふことは出来ません、もし佛に眞の子があるといふのならば、佛の道を求める菩薩をおいて外にないのであります。

この事を説くや、阿闍世王の宮中にある二萬の宮女は皆な佛の道に志し、二萬の神々もまた大に満足して、共に佛の道に向ふた。

王は更に申すやう。

「一切の佛の子は皆な煩惱を離れて、聲聞戒を學び給ふのである。この御弟子達も、どうして眞の佛子でないといへやう。

その時、天界の神々は彼女の徳に感じて、彼女を供養する意から天華を雨ふらした。王舍城内は遍く華の薫りに充たされた。

その時、彼女は静に寶の座から下つて、列座の聲聞達を恭しく禮拜し、種々のすぐれた飲食を供養したのである。そして言ふやうには、

「尊者達よ、汝方はなせに朝から佛の許を離れて、こゝへお出でになりましたか、先づ教を聽いて後に托鉢に出るのが順序ではありませんか。ともかくも、すぐにお歸りなさい、私も後から佛の許へ参りますから。」

○

斯くして、無畏徳姫は父王や母后や、城内の多くの人々と共に釋尊の所に詣でた、件の聲聞達も精舎に歸つて、それ／＼座についた。

その時、舍利弗は釋尊に申すやう。

「世尊よ、この無畏徳姫は造詣の浅からぬ婦人でありますね。

釋尊は仰せらるゝやう。

「舍利弗よ、この婦人は、すでに今までに九十億の佛について、佛の道を求め多くの善根を植わしたのである。

「世尊よ、この無畏徳姫は女の姿を轉へることが出来ませうか。

「舍利弗よ、汝はこの婦人を女と見ているのか、そう計ふてはならん。彼は一

切の人類を救はうといふ誓ひから、たい女の姿を示現してゐるのである。その時、彼女は佛の御前で、「若し大乘の法からは、男もなく女もないのであるならば、どうぞ、妾の身を男の姿に轉へて、大衆に見せて下さりますやうにと誓言するや否や、彼女は忽に男の姿となつて、高く大空に昇つたのである。釋尊はこの有様を見て、舍利弗等のために、無畏德菩薩が遠き將來に離垢佛といふ佛になるべき豫言を説き給ふたのである。

〔出據〕 大寶積經卷九十九、無畏德菩薩會。

阿闍王女阿術達菩薩經。

〔要點〕 聲聞は佛の教に偏り、緣覺は各自の經驗に偏る、又彼等は自利に於ては他を顧みないのである。之に對して、菩薩は佛の教を味ひつゝ現實の經驗を尊重し、自他の救濟を念じつゝ、常にすゝみ常に實動するのである。彼は小乗の人といはれ、此は大乘の人といはるゝ。概して本經の如き所謂大乘佛典は、この圓轉滑脱な菩薩道の開顯を目的とするので、佛教々團の新しい婦人は皆なこの運動に参加したのである。因に、無畏德姫は初

め聲聞に對して萬丈の氣焰を吐いたけれども、後には寶座を下りて心靜に彼等を禮拜した、茲にめざめた婦人の本當の心地があらはるゝ。

〔字解〕①聲即ち佛の教を聞く人々。今は右に述べたやうな融通のきかぬ小乗教徒をいふ。

②釋尊は一切の神々を否定した無神論者であるけれども、因果の道理から、人間よりはすぐれ佛陀よりは劣る或地位を説明する場合に、當時の神々の名を轉用せられたので、かゝる意味の一變したことを注意せねばならぬ。佛教に於て地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間天上(神)、聲聞、緣覺、菩薩、佛陀の十界をたてるのは、この嚴肅な因果の直觀にもとづく。

③我々を眞實の世界へ運びゆく大きな乗りもの、即ち大きな教。菩薩は衆道者の義、今は右に述べたやうな大乘の人々をいふ。

④小乗に於ける最後のささり。

⑤種々な緣即ち經驗から覺らうとすること、今は右に述べたやうな小乗の人々をいふ。

⑥⑦解脱は苦みから免れた状態。涅槃は苦みと迷ひを滅した状態、ささりのこと。

⑧聲聞乘と緣覺乘と菩薩乘と。

⑨⑩眞實の世界はたゞ一つしかない一つ相である、一は二三に對する一ではなくして絶待の一である、絶待の一は消極的にいへば一三等の相なく、積極的にいへば一三等の相を皆なれさめるのである、即ち無一であり、全一である。之を一相即無相といふ。無相とは相なしとも解し、相あらざるなしとも解する。

⑪毒も藥さなり、藥も毒さなる、凡夫法の外には諸佛法なく、諸佛法の外に凡夫法なく、畢竟「達」と「不達」のみ。

⑫梵音ボデー、自覺すること。

⑬正しい法を身とする。

〔注意〕

(一)舍利弗、目犍等の上足の弟子は、本經では聲聞としてひどい目にあはされてゐる、之は無畏徳姫の主張を明にするために、暫くかたき役に扮したのである。大乘經典では概して彼等は聲聞に化けてゐるのである。

八 美容術

釋尊が舍衛城の祇園精舎に在した時である。

そのころ、波斯匿王の妃末利夫人は一人の女兒を産んで、金剛と名けた。この兒は容貌が甚だ醜く、肌は駝の皮のやうに麤澁し、頭髮は馬の尾のやうに麤強して、父の王さへも此兒を見ることを歡はなかつた。そこで内事の役人に命じて、他人に見せないやうに密に養育せしめられたのである。

彼女は漸々に生長して、もはや何とか身の片をつけねばならぬ齡になつた。しかし、何分にも人とおもはれない程に醜いのであるから、縁談の話を持ち出すことも出来ず、さすがに、大王夫妻も當惑しておつた。

ある日、王は一人の侍臣を呼んで、もと豪族に生れた者で現在貧乏をしてゐる一人の男を探さやうに命じた。侍臣は諸處方々を尋ね回つて、漸く一人の男

を探しあてたから、直に御前へつれて来た。

その時、王はその男を密室に伴ふて、具に王女の不器量なことから、良縁の無いことなどを話して、何なりともとらす程にどうぞ王女を貰ふてくれいとたのまれた。思ひかけもなく、件の男は王の願を納れて、「大王の賜でありますれば、たとひ狗でも猫でも歡んで頂きまするのに、高貴な王女を頂くといふは千萬忝けないことで御座います」とおうけするのであつた。

そこで、王は早速その男を大臣にとりたて、王女を娶し、華美をつくした七重の宮殿を新築して、そこに住はしめ、その男に、若し外出する時には確と戸を閉めて鑰を持つて出ること、決して外人にみられぬやうにと、懇ろに注意したのである。

さて、件の男は俄に高官になつた爲に、それからはたび／＼公私の議會に出ることゝなつた。當時の風は夫婦同伴してそうした席に出るのであつたから、

何時となく友達は、彼が獨りで來ることを怪み初めた、彼等は口々に噂しあつた、「あの男が妻君を同伴しないのは、屹度素ばらしい美人であるためか、それとも非常に醜い女であるからであらう」と。

ある時、彼の友人は密に相談して、したゝか彼に酒を飲ませ、酔い倒れたところを見て身體から鑰を取り、窺にその家へ出かけて行つたのである。

さて、家では哀れな婦は、たゞ獨り主人の歸りの遅いのを氣遣ひ、容姿のわるい爲に、夫に憎まれ、そのうへ開い室に入つて、人並の交際はおろか、祿々日のめおかますの日暮をしておる自分の薄倅を悲み慨くのであつた。そして、此上は佛の道を聞いて心を慰めるより外に道がないと、一心専念に佛さまの御出でを念じてるのである。

その時釋尊は彼女の意を哀れに思召して、直にその家に到り、大地から踊り出て、先づ紺色のやうな頭髮を現し給ふた、彼女はその美しい髪を拜んで、心

から敬慕の念を起した。すると、不思議なことには、彼女の頭髪は自然に細く
 軟いで紺青色になりかわつたのである。釋尊は次にお面を現し給ふた、彼女は
 之を拜んで、また忽に美しい顔にかわり、轟々した皮も自然に滑くなつた。
 釋尊は次に御身を腰の上まで現し給ふた。金色に輝いてゐる。彼女は之を拜ん
 で、また忽に天女のやうな端嚴しい相に變つた。そして、釋尊が全身を現し給
 ふた時に、彼女は比なき美しい女となつたのである。
 その時、釋尊は懇に佛の道を教へ給ふた。彼女はその座で信眼を開いたの
 である。

さて、五人の友達は戸を開いて内に入ると、美しい女は茫然としてほゝねん
 であるのである。彼等はその美に打れて、茫然とし、ほうくの體で駆けもど
 つた。そして、鎧を男の帯に著け、何喰はぬ顔で澄してゐたのである。
 宴會は果てた。やがて、男は酔がさめて家に歸ると、奥から美しい女が出て

來て懇に彼を迎へるのであつた。

「旦那さま、お歸りなさいませ。」

彼はその美貌を見て、うれしい氣持はするものゝ、どうしても自分の妻のや
 うに思へない。

「汝は何處の姉さんかいな。」

「何を仰しやります。妾ですよ。」

「そういへば、その様でもあるが、しかし、どうして、そう急に別嬪になつた
 のかい。私はまだ酔がさめないのだらうね。」

「いや、妾は全く美しい女になりました。」

そして、具に夫に對して、先程からの一伍一什を物語り、早く父王の所へ行
 きたいと願ふたのである。

件の男は其旨を王に通じた。王は慌しく彼を制して、監督を疎にせぬやうに

と注意した。そこで、彼は具に佛の御蔭で美しい姿になり變つた事を申しあげると、王は大に歡んで、寶駕を莊嚴して彼女をむかへ、二人を伴れて、直に釋尊の所へ御禮に參つた。

〔出據〕 賢愚經卷二。

〔要點〕 髮、容のよしあしは婦人の一大問題である。しかし美しい心は醜い姿をつぐのうて餘りあるので、こゝにも宗教の門戸が開いてゐる。本經の叙述は例によつて彼女の心の淨まりゆく有様を象徴的に示したのである。

九 才媛、ペーシヤリ

コイサラの波斯匿王の臣下に梨耆彌といふ人があつた。七人の子を六人までかたづけただけれども、末の一人に思はしい縁がないので、窃に氣を揉んでおつた。

ある日、梨耆彌は親しい友が來たので、例の如く縁談の話を持ちだすと、彼は快諾して、屹度近い内に良縁を纏めやうと約して歸つた。

その後、彼は特叉尸利國に行つて、女の祭に會し、嬉々として戯るゝ多くの娘を見たのである。そこで、彼等の群に雜つてその後をつけた。途中に水だまりがあつた、多くの娘達はそれ〴〵靴をぬいで、そこを渡つた。然るに、その中にたゞ一人靴のまゝ渡る娘があつた。そのさきに、また小川があつた、多くの娘達は或は裸になり、或は衣を褰げて入つたが、件の娘ばかりは衣のまゝで渡つた。かくして、彼等は花林に入つて、思ひ〴〵に花を採り初めた、或者は猿のやうに樹に上つて採り、或者は枝をたわめて摘む、然るに、件の娘ばかりは樹にも上らず枝をもたわめず、その邊をさすらひながら、友達から貰ふのである。美しい花は夥しく籠にさゝれた。

彼は不審のまゝ、そつとその理を聞くと、娘は尤なことをいふ。「おちさん

靴は脚を護る道具ではありませんか、陸地では荆棘や瓦や石がよく見わるけれど、あゝした水溜は底が見ぬから危険でせう、それで私は用心して靴をぬがなかつたのであります。又、女は容色や振舞に注意せねばなりません、相好の好悪はごうも仕方がないけれども、不格好な振舞をしてはならんと思ふて、衣のまゝ渡りました、それから、こうして樹に上らぬのは萬一の怪我をさづかうからであります。

此女こそ、波斯匿王の弟曇摩訶美の女であつた。曇摩は昔し罪があつて此國に逃れ、この郷で彼女を生んだのである。

彼は娘の話を聞いて、大に歡び、伴れて彼女の家を訪れた、云ふまでもなく娘を梨耆彌家へもらひうけんがためであつた。

縁談はそれから急に進行して、その後間もなく娘は梨耆彌家へ興入することゝなつた。その時、母親はつきぬ別れをおしみつゝ彼女にこういふのであつた

「汝もいよく先方へ嫁くことゝなりました、永い間不自由を辛抱しておくれたが、これからは妙い衣を着、美しい食を頂くことが出来ます。それで、今後は何よりも鏡を離さないやうにたしなんでおくれ……と、娘は母親の親切を此上もなく喜びうけた。その時、梨耆彌はものごしから此話をきいて念ふやう、

「あゝ、人間の一生は定めなく、好衣も美食もあてにはならないのに、……又日毎夜毎に鏡を見よといふのも聞ぬ話である」と、彼はそう感じたけれども、何事もいはないで、娘を連れて歸旅についた。

その途中のことであつた、一行は旅に疲れて、峠の茶屋に休んだ、その時、彼女は梨耆彌を呼んで早く道へ出よとすゝめた、他の者は一向氣にもかけなかつたが、つながれた象は身が痒くて、俄に狂ひ出し、あはやといふ内に茶屋を壊して、彼等は多く填殺されたのである。梨耆彌は益々彼女の心盡しをうれしく思ふた。その後ある大きな池の畔に休んだ時も、彼女の注意に依て危く水難

を免れたのである。

さて、彼女は梨者彌に嫁した後は、毎日朝は早く起きて、堂舎を掃除し、炊蒸ができるど、まづ娼姑や家族のものに供へ、次には雇人に與へ、皆が仕事についてから自ら食事をとるのであつた。娼もさすがにその忠勤ぶりを深く感じた。

ある日のことである、娼は嫁に對して、「いつぞや、汝が此家へ来る時に、お母さんが申しつけられた、あの好衣の事、美食の事、鏡の事はどうしたのか」と問ふと、彼女は恭しくこう答へた。

「お娼さん、母が好衣と申しましたのは贅澤をすることではありませぬ、衣類を大切にして汚のつかぬやう清潔にせよといふことでありませう。美食といふのも贅澤をすることではなく、能く働けば何を食べても美しいといふ意でせう、又、明鏡と申すのは銅鏡の鏡のことではありませぬ、朝早く起きて内も外も善

く掃除して鏡のやうにうつくしうせよといふことでありませう。

娼は之を聞いて、その優しい心と才氣を喜び、益々彼女を愛し、家中の物は悉く委して、面白く暮した。

又、かういふことがあつた。

ある日、澤山な雁が海濱から取つた粳米の穂を御殿の庭に墮したので、内事の役人達が之を拾ふて王に奉つたことがある。その時王は藥料にならうと考へて、役人達に頒けて殖わさせた。梨者彌もその一分を頂いたので、彼女は懇に畦田を用意して、その種をうへた、その後、王妃が歎を病んだので醫者に見せると、海濱の粳米が一番宜しいといふ、そこで、王は内事の役人にそのことをいふと、或者はごうも生ねませなんだといふて斷り、或者は鼠が食ひましたといふて斷り、誰一人も應ずる者がなかつた。しかるに梨者彌のみは嫁の心盡しによりて大手柄を致したのである。

又、或時、特叉尸利の王は形や色の善く似た二疋の馬を波斯匿王に贈つて、どちらが親か子を尋ねた。之は舍衛城に智者があるかどうかを試みんが爲であつた。その時も、彼女はうまい智慧を出した、「それは二匹の馬を並べておいて、前に好い草を置く、すると、親の方は草を推して子に與へ、子は急いで之を食ふといふのであつた。梨耆彌はまた大名譽を博した。

また或時、特叉尸利王は、大さ、形、麤細、いづれかはらぬ二匹の蛇を送つて、その雌雄を分つやうに求めた、その時も、彼女は妙案を考へた、「滑い甕を敷いてその上に二匹の蛇を置く、雄はどうしても剛いから、うね／＼動き、雌は軟いものを好むから静にしてゐる。

また或時、王は節目のない刀や斧の痕のない、根も頭も同じい木を一本送つて、その上下を分けしめた、彼女はまた考へた、「それは木を水に入れてみる、すると、根は自づと沈み、頭は自づと浮ぶと、こうした事で、梨耆彌は度々大

手柄をしたのである。

彼はまた信仰の厚い女であつた。後、彼の小兒はたくさんに死んだけれども徒に悲しむことなく、之を逆縁として益々道に進んだのである。

〔出處〕 賢愚經。

〔要點〕 古代氣分のたゞ中に、彼女の才氣とすなはちがきわだつた。

十 その肉を割きて

昔、蓮華王の都せし城中に、銀色と呼ぶ一人の美しい女があつた。

ある日、彼女は近所の御友達の所へ、御産の見舞に出かけた、さて、奥の産室へ通つてみると、女は青ざめた顔をして、呻きながら、いま産んだ自分の子を撃つて喰ふとしてゐるのである、髪は亂れ、眼は血走つて、つりあがり、まるで女夜叉のやうである。

彼女はびつくりした。

「もし〜、姉さん、何をなさるの。」

「汝は誰ぢや、……あゝ飢い〜、妾は兒を喰ひますのぢや。」

「姉さん、しつかりしておくれ、……。御宅には澤山な食物があるから、今持つて来てあげるから、まあ〜待つておくれ。」

「いやだ〜、妾は慳貪な女ぢやから、宅のものを食べるのはいやだ。」

「それならば、一走り、妾の宅へ食物を取りに行くから、まあ〜暫く。」

「あゝ飢い、苦しい、脅が破れる。背が裂けそうぢや。汝が出て行く間に、……妾は死んでしまふ。」

こういふて産婦は呻く、狂ふ。嬰兒は切なさにオギャ〜と頻りに泣く。

その時、彼女は心におもふやう、「今若しこの嬰兒を伴れて去けば、女は死んでしまふし、このまゝにして置けば、屹度嬰兒を喰ひ殺してしまふに違ひない

親と子と、二人を救ふものは、もう自分の肉より外にはない……と、こう念

ふや否や、彼女は傍にあつた刀を執つて、兩方の乳をグサリ切りおとして、

「姉さん、さあ之を食べて下さい。」

と差し出したのである。

産婦はもの凄くニタリと笑ふて、血汐の滴る乳を食べた。

彼女の胸は愛に燃れてゐる。

「姉さん、得心が出来ましたか、お腹がふくれましたか。よう聞いておくれ。」

この嬰兒は妾の血と肉で購ふたのですから、妾が暫く育てることにしませう、

……。姉さん、妾はこれから宅へ汝の飲食をとり歸るからして、しつかりし

ておいで。

かく告げて、彼女は満身紅に流るゝ血汐を地に曳きつゝ、漸く我が家に歸つた。

○ 家族のものは、この有様を見て、一様に驚いた。皆な口々に、「一體、誰がそんな目にあわしたのか、

といふて聞く。彼女は平然として

「妾自身です。」

と答へるのである。そして、仔細に産婦の身の上話をして、「自分の肉と血とを献げるのは、第一の布施である」と歎び告げるのであつた。

彼女の一族は皆な真剣な求道者であつたのである。その時、彼等はその話を聞いて、寧ろ彼女を激賞した。

「銀色よ、それは尊いことをしました、しかし、布施を實行しても、若し後悔の心があつたならば、それはたゞの布施であつて、布施波羅密といふことが出来ませぬ。汝はその乳を割いた時に、純一な歡喜の心がありましたか、無心で

ありましたか。その苦しさに悔惱の心を起しはせなかつたか。

彼女は判然と答へた。

「皆さん、妾は愛の心に浸つて布施を實行することが出来ました、何も別の想はありませんだ。

そして、一心に、「妾の願が眞實でありますならば、どうぞ、兩方の乳を本のやうにして下さるやうに」と、誓ふや否や、忽に、二つの乳は本のやうになつたのである。

〔出處〕 銀色女經。

〔要點〕 布施は愛の實動である。特に布施波羅密といふ場合は、施者(自分)と受者(對手)と施物の

のれもひなく、純一な心のまゝに實動する完全な布施をいふのである。

本經には銀色女の至純な愛があらはされてゐる。乳をなげ出した彼女の心は、恐ろしい程に眞實である。——乳が本のやうになつたさいふのは、眞實はいつも償はれることを象徴したのだ。愛に生きゆく者は愛に恵まるゝ人である。

十一 維摩居士と魔界の女

釋尊の時代に、持世といふ一人の菩薩があつた。

ある時、靜室に坐禪しておると、天界の魔王が帝釋天の姿をして、一萬二千の美しい女を連れて、その前に現れた。菩薩は之を見て申さるゝやうは、

「帝釋よ、卿は福應ものである。しかし、その福應を貪らないで、能く享樂の過をみつめて、眞實の法を求めねばなりません。」

魔王は此語に耳をもかさず、いふやうには、

「菩薩よ、此處へこうして美人を連れて参りましたから、どうぞ使ふてやつて下さい。」

菩薩は大に困つて、

「自分の處へ女を連れて來てはならぬ。」

と、左も當惑相である。魔王は、

「なせで御座いますか」

と、そのわけを聞く。

かやうな押問答の最中に、維摩居士が訪れて二人の會話の中へ加つた。

「菩薩よ、之は帝釋天ではなく、天界の魔王で今卿を誘惑せやうとするのであります。時に魔王よ、汝はこの美人を菩薩にさしあげやうとする、その志は誠に奇特であるが、菩薩は佛のお弟子であるから、定めし御迷惑であらうと思ふ、依て、私が代つて申し受けることに致しまやう。」

魔王は妙な人が來たと思ふたけれども、どうすることも出来なかつた。仕方なしに、その婦人を居士に任した。

その時、居士は美人達に向ふていふやうは、

「姉さん、魔王は今汝等を私に與れました。……汝等は宜しく享樂の夢からさ

めて、眞實の法を樂しむやうになさい。

「若しお客さま。法を樂むつて、どういふことですか。

「姉さん、それはこうだ。まづ、佛を信仰してその法をきき、教團の人々に供養をするのだ、樂しんでするのだ、それから、虚榮を離れるのちや、美しいといつては花に憧れ、食べたいといつては食物に憧れ、することなすことに身も心も使はれどうしであらう。さういふ心に打勝つて、忍従柔和の道を守り、情ふかく、規律たしく、善事をはげみ、心を沈めて亂ることなく、理を諦かにして惑ふことなく、永遠の樂を求めのちや。

魔王は氣が氣でない。

「姉さん、早く天宮へ還つて遊ばうでないか。

「旦那さま、卿は妾達を此方へお預けなされたのでせう。天宮の樂よりは、法樂の方が餘程尊うございます。

「魔王は大に困つた。

「もし御客さま、女に執着してはいけませんね。凡て何でも他人に施すのが、先生の所謂菩薩道ではありませんか。

「魔王よ、大にその通りだ。私はもう先刻女を捨てゝゐるから、早くつれて歸るが宜しい、つれて歸れば汝の仲間も女達の話聞いて、少しはめがさめるであらうから。

その時、女達は居士に尋ねた。

「先生、そうすれば、私共はどんな覺悟で魔宮に住めば宜しいのでせうか。

「姉さん、無盡燈といふ教がある。譬へば、一本の燈でも百千の燈に移せば、その光が盡きないやうに、一人でも眞に道に志して百千の衆生を導くならば道は長へに盡きないのである。それであるから、汝等もこの無盡燈の意を得て魔宮に住み、多數の天子や天女を救ふやうに心掛けて下さい。それがそのまゝ

佛恩報謝といふものぢや。

その時 彼等は居士の説を歡びうけて、魔王と共に天宮に還つた。

〔出據〕 維摩經、菩薩品。

〔要點〕 本經には小乗教的な持世菩薩の眞面目な顔さ、大乘的な垢わけした居士の面影が浮彫のやうによくあらはれてゐる。婦人達にもこころした無盡燈的な覺悟があつて欲しい。

十二 須福長者の娘

ベサーリ城の須福長者に、今年あけて十四になる龍施といふ可愛い娘があつた。

ある日のことである。娘は朝早く起きて、身を淨め、鏡臺の前で御化粧をしてゐると、俄にあたりが明るくなり、不思議な光明が自分の邸を照すので、驚いて窓を開けると、門の外に佛がたゞせ給ふのであつた。星中の月のやうに、

御相好は輝き、諸根はいと寂靜であらせられる。——娘はその崇高い御姿を拜んで、心から佛のみ教を受けやうと念ふた「あゝ、今こころして佛と佛の御弟子達にあわせて頂くは幸福なことである、之を御縁として菩提の心を起し、菩薩の行を修めて、佛と同じ證を得たいものである……。」

その時、惡魔は娘の發心を妨げやうと思ふて、父の姿に化けてその傍に現れた。

「娘よ、汝の念願は餘りに大きい過ぎる、佛の道は甚だ遠くして、到底なまやさしいことで達することは出来ぬのである。そうであるから、左様な大きな念願は止めて、寧ろ小乗の阿羅漢の位を望むが宜しい。今幸に佛が在ますのであるから、この佛に歸依して阿羅漢を求めるのが宜しい、阿羅漢になるのは佛に成るのよりは、遙に心易うて、しかも、同じやうに世間の迷を離れるのであるから……。」娘よ、父さんだからこころいふのだ。

娘は答へるやう。

「父さん、そうではありません、阿羅漢も佛さまも俱に世間の迷を離れ給ふけれども、その御徳は決して同様ではありません、佛さまの智慧は大空のやうに大きく、阿羅漢の智慧は針の穴のやうに小さく、特に人類を救ひ給ふ御力は比べものにならないのであります。だから、心ある者は皆な佛の果を求めますので妾もこの大願を起したのであります。

「娘よ、昔から婦人が輪王になつたといふ例さへないのに、どうして佛になることが出来やうか。そういふ應はぬ望みを起すよりは、父さんのいふやうに阿羅漢を求めるとか宜しい。

「父さん、御話は御尤もであります、妾も婦人が輪王になれないといふ事は承知しております、帝釋にも、梵天にも、佛にもなれないといふ事は承知しております、そうですから、妾は精進して先づ女の身を男の身に轉へて、然る後に

佛果を求めやうと思ふのであります。

「娘よ、そんなに熱心なら、父さんは何にもいひませぬ、しかし、佛果を求めるときには、世間の愛著はおろか、一身を捨てる丈の勇氣と覺悟がなければなりません、汝にはそれ丈の勇氣があるか。この樓上から身を投ずる底の覺悟がなければ、到底佛果を得ることは出来ぬのである。

その時、彼女は父の(惡魔)の話を聞いて、深く決心の色を現した。そして、つか／＼と欄に近いて佛を伏し拜み、

「世尊よ、妾は今天中之天(神の神)に歸依いたします、妾は身命を捨て、も菩薩の道棄てることは出来ませぬ、妾は世尊にこの身命を捧げませう、妾は一身を捨して道にすゝもうと思ひます。

と、こゝろ言ひ終るや否や、忽に身を跳して樓上から身を投げたのである。しかるに、未だ大地に達せぬ間に、彼女は雄々しい男子に轉じて、佛の前に起つ

たのである。
その時、釋尊は微笑して、御口から五色の光明を放ち、阿難に對して仰せられた。

「阿難よ、この娘は昔から多くの佛に奉へて、いろ／＼な功德を積んだのである、この後も、多くの佛に仕へて、いろ／＼な功德を積み、功德が成就して七億六千萬劫の後に龍施佛といふ佛に成るのである……」

彼女は佛の豫言を聞いて大に歡び、父母に請ふて出家することゝなつた。家族のものも、まのあたりこの奇瑞を見て、皆な求道の念を發した。たゞひとり魔王はこの有様を見て樂まず、快々として立ち去つた。

〔出據〕 佛說龍施女經。

〔要點〕 我々は道を求めんとする時に、種々な惡魔に出遇ふ。忙しいさか、六かしいさか、そんなに眞面目になつてどうするさか、内から外から、いろ／＼な理窟や故障をきく。之は

皆な惡魔の誘惑である。惡魔は種々な假面をかぶつて我々の前にたつ。大乘を忘れて小乘にゆくのもやはり惡魔に欺されたのである。此點に於て、私は龍施女の精進のこゝろを思はねばならぬ。

十三 法志長者の妻

ある日、釋尊は舍衛城の法志長者の家を訪れ給ふた。その時、長者の妻は女中の過失を咎めて頻りに打擲しておつたが、釋尊の來訪を知つて、深く慚愧の心を起し、直に御前に進み出て、發露懺悔した。

その時、釋尊はこう仰せられた。「汝は幸福な女である、凡て過失を過失と知つて將來を警めるは尊いことである。總じて婦人と生れた者は、愛欲の心が深く、姿態に浮身をやつし、嫉妬が強く、口數が多すぎる。又、形貌を好み、富貴や權勢をあてにするけれども、それは皆な幻のやうに儚ないものである。何

よりも使人を大切にし、我子のやうに慈しまねばならぬ。……所謂①六道の別も十界の別も皆な心が本であるから、常に心を養はねばならぬ。彼女は此教を聞いて、いよく歸依の心を起し、深く自分の朦冥を責めるのであつた。

釋尊は語をついで仰せられた。

「さて女よ。十ヶの善を行へ、殺すな、盗むな、姦淫するな、妄語②、兩舌と綺語と悪口とを慎み、貪欲と瞋恚と愚痴に注意せよ、それから布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の③六波羅密に奉へ、慈、悲、喜、捨の④四無量心を養へ使人に對しては常に因果應報の道理を説き、正義の道を教へて、かりそめにも打つたり搦いたりしてはならぬ。婦人の著けるべき瓔珞は、信念と戒律と禪定と智慧である。又、眞に道を求める者は、大乘の心に住して「男だから女だから」といふヒガミを持つてはならぬ。⑤空の眼が開いて⑥佛性に覺めた者は、

男女の執着を離れて⑦無名身を得、人間として生き、世界を獨歩して一切の人類を救済するのである。

彼女は此教を聞いて信眼を開いた。

その時、帝釋天は釋尊の後から口をはさんだ。

「姉さん、婦人として道にすゝむことは容易でありませぬ、それだから、男子に身を轉して道を求めるか、それとも日の神か月の神か天帝が輪王を望んではどうですか。

彼女は偈を以て答へた。

天帝も

月の神、日の神も

轉輪王も

朝露のごと

あわれ、儂なきものぞ

⑧ 五蘊は幻にして

男女の相なし

一切を空了すれば

女ながらに、道は開けん。

天帝は此偈を聞いて口を緘んだ。

釋尊は彼女の理解をたゞへて、將來佛果を開くべき證を與へ給ふた。彼女は

また現身に男子となつたのである。

その時、多數の女中は佛の前に進み出て、「尊卑の別は本來あるもので御座い

ませうか」と尋ねた。佛はこう仰せられた。

「尊卑の別は本來あるものではなく、心の所存から起るのである、それだから

卑しい者でも發心すれば、佛にまでも進み、尊いものでも放逸憍慢であれば、

惡道に墮ちるのである。

彼等もまた信眼を開いて、忽に男子に變つた。

〔出據〕 佛說長者法志妻經。

〔要點〕 (一)六道十界の別は心から起る」さか、空の眼が開けて佛性に覺めた者は無名身を得る」
さか、五蘊は幻にして男子の相なし」さか、こゝにいふ文句がこの後たび／＼出る、すべて
附錄に委し。

(二)長者の妻に對して、先づ懺悔の徳をたゞへ、次に婦人の缺點を指摘し、後に婦道を
説く、十善や六波羅密や四無量心は、もともと男女共通の道なれども、婦人は婦人的に
實際にあてはめて味はればならぬ。

〔字解〕①六道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つ。之に聲聞、緣覺、菩薩、佛陀を
加へて十界といふ。

②にまいじた。おもれる。こびる。

③完全な六つの行ひ。

④ 苦を抜くを慈といひ、樂を與へるを悲といひ、身と心に歡ぶを喜といひ、へだて心のないのを捨といふ。我々凡夫にも、こゝいふ心はあるけれども、純一でなく、自ら制限がある。この心の量りなく深く廣きを四無量心といふ。

⑤ へだて心なく、差別に囚れざる境地。

⑥ 佛に成るべき性能。涅槃經には「一切の衆生は悉く佛性を有す」とある。信の眼が開く時に、佛性を確認せしめらるゝ。

⑦ 男と女とが名のない身とは、中性のこゝではなく、男は男のまゝ、女は女のまゝ生きゆく境地をいふ。

⑧ 人間は色、肉體(受・感覺・感情)想(知覺)行(統覺、根本意志)識、一般の精神作用の五つの蘊りである。

十四 愛 の 力

釋尊がコサンビ一城の瞿師羅園に在した時である。

ある日、優填王は舍摩夫人と五百人ばかりの宮女をつれて郊外へ狩獵に出られた。その時、舍摩夫人は彼方の森にある修行者が坐禪しておるといふ話を聞いて、急に話がきつたくなり、宮女達をつれて、その修行者の所へ行つた。その時、王は宮女達が森の方へ行くのを見て、善い獲物でもあること、思ひ、威勢よくその方へ駆けて行つた。夫人はもとから王の殺伐な性質を知つてゐたから、萬一修行者に疎忽な事があつてはならぬと思ふて、右の手を舉げて、王に注意を與へた。王は夫人から注意せられて、彼等が修行者の所へ行くことを知り、即ち、馬から下り、弓を捨て、彼等と共に修行者を訪ねた。その時、修行者は再三王から話をするやうに求められたけれども、王の性質をよく知つておつたからして、わざと何事をも語らなかつた。王は窃に禪定の話を聞いてみやうと思ふた、そして、若しその話をしてくれれば、一代供養をつとめやうし若しその話をしてくれなければ、その場で殺して呉れやうと、かやうに決心し

て。また彼に説法を求めた。しかし修行者は禪定を悪用せらるゝことを恐れて猶も沈黙して何事をも語らなかつた。危いことであつた。然るに、その時、王は遙か彼方に夥しい鹿があらはれたのを見て、急に氣を變へて、慌たしくその方へ駆けて行つた。夫人は修行者の身を心配して、早く此場を去るやうに勧めた、こゝまゝにしておけば、再び來つて彼を殺し王自身が罪を犯すことを恐れたからである。彼は釋尊の所へ詣る筈であつたから、夫人の語を納れて高く空中に騰り、しづかに空を飛行して去つた。

後に、夫人は修行者の神通力の不思議なことをたゞへて、王に奉佛の志を起すやうに勧めたのである。

○
優填王には舍摩夫人の外に帝女といふ第二の夫人があつた、彼女の篤信重厚なるに反して、帝女はこのほか嫉妬深い女であつた、そして、何時も何か事

があれば彼女を讒言して、王の愛を一身に集めやうとしておつた。

或時のことである、舍摩夫人は釋尊の御恩を憶ひ出して、王の前で「南無佛陀々々々々」と稱へた。その時、帝女はわざと「南無大天々々々々」と稱へた、大天といふは王の歸依する神の名である。そして、王に申すやうは、「舍摩様は怪しからん方です、大王様に養はれておりながら、大王様のことを思はず、大王様の御信心なざる神様を忘れて、佛陀を憶ふなんて、すいぶんですね」。王は平生二人の夫人の居間で、交るゝ食事をしておつた。或時、帝女の居間へ行くと、彼女は思ふ所があつて、捕鳥者に申しつけて、一疋の活鳥を御前へ運ばせた、王は其の活鳥を見て、今晚は誰の居間で食事をするのかと尋ねた。彼女は、「今晚は舍摩様の御居間ですよ」と申した、そこで、王は其の活鳥を夫人の所へ運んで料理をするやうに命じた。然るに、夫人は鳥の活きておるのを見て、肯て受けず、王の許へ送り還へされた。王は怪んだ。しかし、夫人が平

生から殺生を好まぬことを知つておつたからして、格別に咎められなかつた。その時、帝女は王に申すやう、「舍摩様は佛教の信者ですから、佛陀さまや坊さん達に供養をする時だけは、よく生物をお殺しなさいますよ」。王は彼女の語を信じて、再びその活鳥を夫人の所に運ばしめ、釋尊に御供養申すやうに傳へしめた。彼女は自分の計畫のすゝむことを喜んで、捕鳥者に言ひふくめて、その鳥を殺して、夫人の所へ送らしめたのである。夫人はその鳥をすぐ厨手の方へまわした、その時、王は捕鳥者から其話を聞いて、むら／＼と瞋恚の炎をもち、實に怪しからん女である、自分の食用の時には、殺生が嫌だといふて生物をうけず、他人を供養する時には、さつさと生物を殺すといふは、怪しからんことだ。」

かくして、王は直に舍摩夫人の居間に趣いて、容赦もなく夫人を射殺そうとした。夫人は慈三昧に浸り、愛を以て王を迎へた。……愛の力か。王が放

つた所の矢は、皆な中途に墮ちて、反て鎌を王の方へ向けたのである。

その時、夫人は靜に申すやう、

「大王さま、あやまつて、自分を害し給ふな。」

「心得ぬことを申すな。」

「大王様、妾はお蔭で不還の證りを得ましたし、別に過を犯した覺わがありませんから、少しも恐ろしうございませぬけれども、大王様はこのために重い罪をお受けになりますぞ。」

王は夫人の強い愛の力に驚き怖れた。更に、夫人から詳しい事情を聞いて、自分の不明を謝まり、深く愛敬の心を起したのである。

○

帝女はごこまでも怨めしい女である。また或時、夫人がたび／＼御寺へ参るといふ話を聞いて、故に王に讒言し、夫人とお寺の坊さんとの間が怪しいと云

ひだしたのである。怒りばい王は、また彼女の言を信じて、夫人を射殺そうとした。その時も、王が放つた所の矢は夫人の所へ行かず、皆なまるもどつて、王の頭の上で炎々燃わあがつたのである。

王は前にも増して驚き怖れた。

「舍摩よ、汝は天女か。」

「いゝね。」

「汝は龍女か。」

「いゝね。」

「然らば、夜叉女か、乾闥婆女か、羅刹女か。」

「いゝね。」

「舍摩よ、汝は本當にどういふ人間か。」

「大王さま、妾は佛陀の所で正法を聴聞し、五つの戒を守る在家の信者でございませう。」

「ごいませう、妾はいま慈三昧に浸っておりますから、汝の罪を罪とせず、汝自身もお怪我をなさらないのであります。大王さま、どうぞ、心から如來さまに歸依して安隱な身になつて下さい。」

優填王は夫人の信念の力に感激されて、遂に釋尊の所へ詣づることゝなつた。

王は釋尊の所に詣て、先づ申すやうは、

「世尊よ、私は肉欲の奴隷であります、私はあの女の讒言に迷されて、如來と御弟子達に毒害の意を起し、誠實な私の妻を恐ろしくも殺さうと致しました。私は全く逆罪を犯しました、世尊よ、聖弟子達よ、どうぞ、私に歡喜を施し私の懺悔を聽して此罪を滅して下さい。」

釋尊は王の切ない心を受け納れ給ふた。

王は語を改めて申すやうは

「世尊よ、私は全く婦人のために迷はされて、心が狂ひ、瞋毒の心を起して、

⑩ 墮獄の身となりました、そうでありますから、どうぞ、廣く世の人のために婦人の諂曲と虚誑の過を説いて、婦人に近かぬやうに、永切の苦を免るゝやうに、御導き下さい。

「王よ、汝の問は間違つておりませんか。」

「世尊よ、私の問は決して間違つておりませぬ、私は婦人に欺されたのですから、私はたゞ婦人の欠点を御尋ねするのです、どうぞ婦人の諂曲と虚誑と邪媚を御示して下さい。」

王はかやうに三度願ふた。

その時、釋尊は王に對して、

「王よ、汝の問ひ方は正しくありません、汝は先づ自身を反省して、男子の欠点を觀へ、然る後に婦人の欠点を觀へねばならぬのである。」

と、こゝろいつて、懇ろに男子の四つの欠点と婦人の欠点とをお説きあそばさ

れた。

優填王は佛のみ教に覺めて、在家の信者となつた。

○

舍摩夫人の終は近づいた。

その後、領土内に反逆を企てるものがあつて、王は自ら遠征の旅に就かれたことがある、その時、王は出發に臨んで、無憂大臣に政務を托し、わざ／＼二人の夫人を呼んで、睦しく留守を預るやうに申しつけられた。しかるに、帝女は王の不在を機會に、竊に大臣と謀し合せて、夫人を殺害せんと企んだのである。或晩のことである。舍摩夫人は獨り靜に經を誦んで心を懋め、經文の要所／＼を寫さうと思ふて、大臣に數多の樺皮と具葉と筆墨と燈明とを用意するやうに命せられた。大臣は之を機會に數多の樺皮を宮門に運んで、ひそかにそのうちへ火と炭とを入れておいた、夜は次第にふけて風は凄しく吹く。夫人は前

後を忘れて寫經に餘念なかつたが、忽に人の叫び聲に驚いて、窓を排くと、早やあたりは一面の火である、無憂大臣は劍を抜いて、消防につとめやうとする城民達を追ひ拂ふてゐるのであつた。——舍摩夫人は粗々彼等の悪計を讀んだらしい。——けれども少しも狼狽することなく、靜に樓上に昇つて、泣き叫ぶ宮女達に、業報の免れ難きことを諭した。そして高らかに、

われはつねに

城壁の隙より

遙に精舎を望み

世尊を拜して日を送りぬ。

われはつねに

世尊の教を修めぬ。

われは今すでに

⑩ 眞諦を獲て心は樂し。
と、最後の偈を唱へて、勇しく數多の宮女と共に、飛蛾のやうに猛火の中へ投じたのである。

あゝ、美しい夫人の一生は、こうして美しく終つた。

〔出據〕 增一阿含經卷廿三、

根本說一切有部毘奈耶卷四十八。

大寶積經卷九十七、優陀延王會。

佛說優填王經。

〔要點〕 舍摩夫人の言行は婦人方にいふ／＼なことを教へる。第一の話だけ見ても夫人の篤信と用意の深いことが偲ばれる。第二第三の話には、婦人のいぢわるい心、嫉妬、暗闘のすがたがよく見れてゐる。嫉妬ほど恐ろしいものない、帝女は遂に夫人を殺したのである。こうした苦境にありつゝ、信に生き愛を以て始終せし夫人は尊い女である。

〔字解〕 ①心を一境に止める修養、心が定になるさ、い／＼な力が出てくる。神通力はそれであ

る。

② 歸命と譯す、歸依すること。

③ 三昧は禪定と譯す、慈悲の心に浸ること。

④ 信仰に入つた境地を預流果といひ、更に貪瞋煩惱の薄く境地を一來果といひ、五つの煩惱に打勝つた境地を不還果といひ、最後のさとりを阿羅漢果といふ。

⑤—⑨ 當時の人々が信じてゐた神の名。此等の神々は折々人の姿をして現れるといふので、こゝにいふ問を起したのである。

⑩ 地獄に墮らること。

⑪ 業は身體と言語と精神のハタラクキ、そのハタラクキは消滅せずして、相當の報をうけしめる。所謂三世因果の教。

⑫ 眞實の道にめざめ、信仰を獲て心は樂し。

十五 勝蔓夫人

勝蔓夫人は、波斯匿王の妃末利夫人の愛女である。妙齡になつて、阿踰陀國の友稱王の許に嫁いだ。

ある日、夫人は久しぶりに國元からの便を受けた。それは、父と母とか眞心をこめて認めた文書で、内事の役人旃提羅がわざ／＼持つて來たのである。夫人は恭しくおし頂き、やゝ驚きの眼をもて披くと、中には、細々と釋迦如來のことが認めてある、そして、一刻も早く御訪ねをするやうにと勸めてあつた。夫人は先頃から、釋尊が此城へ御出でになつたといふ話を聞いて、是非に一度お参りをせやうと思ひながら、事に障へられて果さずにゐたのであるから、このほか兩親の親切を身に泌みて歡んだのである。

夫人はその後間もなく釋尊に歸依して、美しい佛教の信者となつた。そして

友稱王が國父のまゝ、法父として七歳已上の男子を教化したやうに、國母のまゝ、「法母」として七歳已上の女子を教化したので、阿踰陀國に大乘佛教の興つたのは、全くその賜であつたのである。

夫人に關する史實は此外に何にも傳つてゐない。しかし、幸に「勝蔓師子吼一乘大方便廣經」といふ一卷のお經が残つてゐるから、今はその中から讚佛歌と、十大受三大願とを譯出してその爲人を偲ふこととする。

○

如來の妙へなる色身は

世に等しきものなく

類ひなく不思議なり

われは、この法王に歸し奉る。

六人

如來の色身も

如來の智慧も

ともに盡くるを知らず。

法身は常住なり

われは、この法王に歸し奉る。

心の悪と過と

身の生と老と病と死とを降して

① 難伏地に到り給ふ

われは、この法王に歸し奉る。

② 智母を知り

智慧自在の身となりて
すべでの法を攝持め給ふ
われは、この法王に歸し奉る。

われは、量りなき人を禮し奉る。
われは、類ひなき人を禮し奉る。
われは、邊しなき人を禮し奉る。
われは、議りなき人を禮し奉る。

われを「哀愍」みまもりて
心の心を増長せしめ
この世も後の世も

願くは、「攝受」したまへ。

— 讚 佛 歌 —

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、受くる所の戒を犯すことはありません。

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、師長の者に向つて慢心を起すことはありません。

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、一切の衆生に對して恚りの心を起すことはありません。

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、他人の容色や所持品に對して嫉みの心を起すことはありません。

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、精神の上にも物質の上にも慳む

心を起すことはありません。

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、自分のために財物を受け蓄へずすべて受くべきものかあれば、貧苦にある者を濟ふために用ひます。」

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、自分のために、四攝事を修めず一切の衆生のために、愛染なき心、厭足なき心、聖礙なき心を以て、衆生を攝めやうと思ひます。」

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、若し孤獨のもの、獄にあるもの疾病、厄難、種々の困苦にある者を見れば、直に適當な方法を考へ、どこくまでも、苦を濟ひ、安らかさを與へやうと思ひます。」

「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、わけなしに鳥獸を捕へ養ふものや、種々の惡ひ行ひや、戒を犯す者を見れば、逃すことなく、妾が得た力のまゝに、懲すべきは懲し、論すべきは論さうと思ひます。或は懲し或は論すのは

實に正法を永く保たしむる所以であつて、正法が行れば、神のやうな人間か出來て、惡道は自然に減少し、長へに如來の正法が實動するのであります。」「世尊よ、妾は今日から佛の證果を得るまで、正法を攝受して忘れることはありません。」

—十 大受—

「妾はこの實願によつて一切の衆生を安んじ、この善本によつて如何なる生を受けても、正法智を得ることに努めませう。」

「妾はこの智慧に徹した上は、飽くことなく一切の衆生に説き示します。」

「妾は、この正法を攝受し護持するためには、身も命も財も惜みません。」

—三 大願—

【出據】 勝鬘經。

【要點】 我々は勝鬘夫人の覺悟と實動を見て、佛教婦人をたのしく思ふ。我日本に於て、光明

皇后を初め、多くの佛教婦人が社會事業に實動したのは、一に夫人の感化によつたのである。まづ十大受を見ると、第一は廣く在家の男女に共通する一般佛教徒の掟である。不殺生は人格尊重の思想に基き、不偷盜は經濟問題の根底を示して勞資問題を解決し、不邪淫は貞操を初め各種の婦人問題を警め、不妄語は人倫道德の要を示し、不飲酒は所謂禁酒問題を提擧するのである。次に第二第三第四第五に、慢心と恚心と嫉心と慳心を誠むるは、男女共通さはいひ條、特に婦人の反省すべき欠點である。次に、第六第七第八第九は他人に對する心得で、約せば四攝事にわたる、愛とその實動である。それから第十は正しく夫人の信念である、佛の法に攝められ、佛に哀愍せらるゝから、自分を慎み、他を哀愍し他を攝めゆくので、前の九ヶ條はこゝからこゝるのである。更に三大願はごこまでも正法に徹底し、之を衆に頒ち、身を捨て、法を護らうといふ念願であつて、夫人の強い覺悟を見せしめらるゝ。詳しいことは拙著「韋提希夫人」を見て下さい

〔字解〕①制伏し難きことを制伏したる境地、即ち佛果のさきり。
 ②正しい智慧。智慧はさきりを生む母である。
 ③佛教の社會道德に關する徳目。布施、愛語、親切な言葉、利行（公益を計ること、社會奉

仕）同事（自らを團體に同化するこゝ）、但し社會の惡事にまで自己を同化するこゝは佛陀の誠められた所で、特に法による同事（Samañtā Dhammāsu）勤めらした。

- ④十の大なる誓ひ。
- ⑤善の根本。
- ⑥正法を體得する智慧。

十六 韋提希夫人

— 信のこゝろ —

韋提希夫人は、有名なる王舎城悲劇中の主なる一人である。阿闍世といふ不孝な子のために、七重の室に幽閉せられて、さんくんに泣いた婦人である。しかし、彼女はこの受難のうちに恵れて信仰に入り、この涙を淨めて美しい佛教婦人となつたのである。

X X X X X X X X

釋尊が初めて夫人を獄裡に慰問なされた時に、彼は先づこういふた。

「世尊よ、妾は前生に何の罪があつて、こんな悪い子を生んだのでせうか。」

夫人は子供が欲しさに、卜者の語を信じて某仙人を殺したのである。しかし妊娠して見ると、氣持がわるいので、阿闍世を産む時には高樓から産み落して殺さうと斗つたのである。阿闍世は全く呪はれた子である。こうした秘密の罪を反省するならば、こういふ勝手は云へない筈である。しかし、こゝに女の愚痴があり人間の悲しさがある。

夫人はついで、こういつた。

「また、世尊は何の因縁があつて、あの悪い提婆と親族になられましたか。」

我子阿闍世の逆害は、釋尊の弟子である提婆の誘惑による、また、提婆が悪心を起したのは、或問題から釋尊に叱られ、教團の人々から疏んせられた爲でもある、してみれば、王舍城の悲劇の究極の責任者は、釋尊でなければならぬ

と、こう思ふたのである。初めは自分の罪ではなうて自分の子の罪であるといひ、次には自分の子の罪ではなくして提婆の罪であると諷し、その提婆の罪を釋尊にまで負さうとするのである。こうした虫のよい論理は、しばしば婦人の用うる所である。現實暴露だ。

その時、夫人は五體を地に投げて、

「世尊よ、妾はつくづくこの娑婆がいやになりました。どうぞ、苦惱のない處を教へて下さい、そこへ往生れたう御座います。」

と、求哀懺悔したのである。

しかし、之は眞實の懺悔ではない。娑婆がいやになつたといふのは勝手である。娑婆がわるいのではなうて自分がわるいのである。苦みのない處へ往きたいといふのも勝手である。無自覺な無反省なものは、何處へ行つても小言は已まぬのである。眞に自分の罪に覺めて、佛の救済を仰ぐもののにのみ好い處は惠

まるゝのである。けれども、ともかくも一條の活路を求め初めた。
 この時、釋尊は夫人のために、^①阿彌陀佛の極樂世界を示し、阿彌陀佛の宗
 教を説かれたのである。

○

釋尊は先づその順序として、道德と哲學と藝術とのお話をなされた。嚴肅な
 道德生活は世人の推奨する所である。父母に孝養し、師長に事へ、慈みの心を
 以て人に對し、十種の善業を修め、更に佛教に歸して、「三寶を敬ひ、戒律を守
 り、威儀を正しくすることは、清淨な行業である。深遠な哲學に生きること
 尊ひことで、所謂一菩提の心を發して、深く因果を信じ、大乘の經典を讀み、
 之を他の行者に勧めることは、また清淨な行業である。殊に藝術の生活は快
 もので、まづ、心を一筋にして西方を想ふ、落日の狀を觀する、次には、清
 らかに澄みきつた水を觀じ、それから、極樂の寶地や、寶樹や、寶池や、寶樓

や、華座を觀じ、莊嚴な淨土の光景に浸ることは、寂かな樂みである。釋尊は
 先づ斯様なお話をあそはしたのである。

彼女は此の話を聞いて自身を反省せずにはおられなかつた。過去の半生を省
 みると、父母に孝養したこともなく、懇に師長に事へたこともない、近頃は亡
 き親のことはおろか、現前の師長にさへ御無沙汰勝である、動もすれば怨みの
 心を以て視る、自分のために生みの子を闇から闇へ葬らうとしたこともある。
 善いと思ふたことさへ、考へてみると皆な^②雜毒の善であり虚假の行である。
 毎日／＼得手勝手な一日おしの生活をしてゐるのである。何事も因果應報に違
 ひないのだけれど、そう思ふ後から愚痴の心が出て来る、秋の日に掃除をする
 と、掃除する後から／＼ばら／＼と落葉がするやうな工合である。陰氣な七重
 の牢屋におつては、なか／＼莊嚴淨土の光景は浮はない。たまく、それらし
 い光景が浮んでも瞬く間に消けてしまふ、そんな夢幻世界をおふてはおられな

い。……

釋尊のお話は一つ、韋提希の心を裏きるのであつた。たゞ夫人の胸に、キチン響くのは、「汝は心想羸劣の凡夫である」といふお言葉であつた。道徳も哲學も藝術も、それは皆な念佛の宗教に入る方便の教である、準備の教である。大地はならされなければならぬ、黒い土は黒い土のまゝだけれど、堅いまゝではなく軟くならされなければならぬ、ならされた土に、おろされた種が芽生へるのである。夫人の羸い劣つた機は、羸い劣つた機のまゝでいゝ、どうにもならないのであるから。しかし、自分の羸いこと劣つたことに、或程度まで氣づかなければ、惠まるゝ阿彌陀佛の救ひに觸れることは出来ないのである。凡夫は凡夫のまゝでいゝ、聖者にはなれないのであるから。しかし、阿彌陀佛の救ひに惠まれたものには、凡夫の自覺がある、人間の自覺がある。——自身を省みない者は永遠に生きられないのだ。

夫人は遂に釋尊の方便に依て、すなおなこゝろになり、阿彌陀佛に救はれ、念佛に生きたのである。

③ 無量壽佛には八萬四千の相がある、一々の相に、各八萬四千の隨形好がある、一々の隨形好に、復八萬四千の光明がある。一々の光明は、偏く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはぬのである。

「佛の心といふは、大慈悲である、無縁の慈悲を以て、一切の衆生を攝めたまふのである。

何といふありがたいお言葉であらう。八萬四千といふのは、或分類法によつて、我々の愚すがた、いたましい、人間性を解剖した語で、それに對する意味から、佛に八萬四千の相好、八萬四千の隨形好、八萬四千の光明を説くのである、こうして、函と蓋と相應するやうに、佛の光明は我々の根機と相應して

我々を救ひ給ふのである。念佛の衆生のみ、この大慈悲に徹し、大慈悲に攝められて、「攝取不捨」を實感せしめらるゝのである。

夫人はその後、^⑧ 観音のやうな、また^⑨ 勢至のやうな女性となつた。經に

「其の光は柔輭くして、普く一切の人々を照し、寶の御手を以て、衆生を導き給ふのである。」

といふは観音菩薩の徳をいひ、

「智慧の光を以て、普く一切の人々を照し、無上の力を以て、我々を惡道から免れしめ給ふのである。」

といふは勢至菩薩の徳をたゞへた語である。婦人はどうしたとて愛に生きねばならぬ。愛は彼の生命である、しかも、正しい智慧を持つた強い力の所有者として。

夫人の前半生は明に失敗であつた、しかし、妻として躓ける彼は母として復活することが出来、その後半生は観音のやうに優しく、勢至のやうに強く暮したのである。その後、阿闍世が長い夢からさめて、重病に苦み、悔恨の涙にくれた時に、彼は昔の事はすっかり忘れて、厚く看病につとめ、宗教をすゝめ終に、釋尊のみ許に行かじめ、阿闍世をして信の人と成したのである。彼女は信の力に由て、本當に家庭を改造したのである。

〔出據〕 觀無量壽經。附錄終り参照。

〔要點〕 佛教婦人として傳ふべき人は少くない、その多くの婦人の中で、代表的な人は誰れだといへば私は勝鬘夫人と、この韋提希夫人だと思ふ。而して、信のすがたは韋提希夫人の内生活に善くあらはれ、信生活のすがたは勝鬘夫人の實動に善くあらはるゝ。此の二人の女性に就ては、拙著「韋提希夫人」に詳し。

〔字解〕①阿彌、は梵音アミタ。無量と譯る、アミタイアハ(無量の光)、アミタイユス(無量の

壽)の略稱、ゆへに、この佛を無量光佛、無量壽佛と譯する。量りなき光と壽を持たせらる、大人格である、この佛の大慈悲を信受してのみ、われ／＼は救はれるのである。極樂は、梵語スクハローワテの譯、完全な世界を意味する。我々夫婦は佛を信じ、現に佛の心に導かれつゝ、かゝる境地を彼岸に期するのである。親愛聖人は最も鮮明にこの宗教を教へ給ふた。

②我々の所謂善には、多少とも迷の毒が雜るから、雜毒の善といふ。我々の行ひは表面はまじめでも、腹底にいやな心があるから虚假の行といふ。

③①を見よ。

④⑤相は相好すがた、隨形好は一々の相好に在る細かい相好。

⑥無限の慈悲。

⑦佛の光明(めぐみ)の中に攝め取られて捨てられぬこと。信の實證はこゝに在り。

⑧⑨阿彌陀佛の脇士。觀音は愛の化身として、勢至は力の化身としてあらはる。

十七 七人の娘

釋尊が拘留國の分儒達樹園に在した時のことである。その國に摩訶密といふ婆羅門があつて、世にも稀れな美しい七人の娘を持つておつた。彼等はいつても流行の新衣を纏ひ、高價な璣珞をつけて、見る人毎に自分の美と警を誇つてゐた。

或日 分儒達は件の婆羅門を訪れて云ふやうは、

「摩訶密さん、汝はいつも娘の御自慢だけれど、廣い世間にはまだどんな美しい女があるかも知れぬ、そらだから、ひとつ娘御を連れて國內を巡遊し、篇くと世間の評判を聞いて見たらどうですか。そして、若し娘御をかれこれ批難するものがあれば、汝は私に五百兩下さい、その代り、汝の御自慢通りであれば、私から汝に五百兩出させよう。」

「婆羅門は早速同意をし、それから前後九十日の間、諸處方々を巡遊したる所、到る處大評判で、いよ／＼鼻を高くして歸つた。

その後、分儒達は改めて婆羅門にいふやうには、

「摩訶密さん、今佛さまが近くの精舎に御滞在中である、佛さまは世界の第一人者であるから、もう一度佛さまに娘御をおみせになつたらどうですか。

と、婆羅門はまた彼の注意を納れて、直に佛の所に詣でた。そして、さも得意氣に、

「御出家さま、卿はいつも諸國を御巡りのことであるが、こうした美しい女を御覽なされたことはありませんか。

といふのであつた。釋尊は一喝して、

「この娘達には、一つも好い處はない、まことに醜い女だ。

と仰せられた。婆羅門はいら／＼した。

「御出家さま、夫れは怪しからん仰せです、國中に於て誰一人も此女を醜いといふものがないのに、卿はどういふ理由から醜いと申さるゝのか。そも／＼、好いといふは何が好いのですか。

釋尊は仰せられた。

「婆羅門よ、眼色を貪らず、之を好いといふのである、耳聲を貪らず、鼻香を貪らず、舌味を貪らず、身は觸を貪らず、意惡を念はず、之を好いといふのである。手は人の財物を盗まず、口は人の惡を説かず、綺語せず、貢高らず、生死の實際を辨へ、布施を好み、因果を信じ、三寶を敬ふ、之を好いといふのである。婆羅門よ、容姿や衣装の好いのが好いのではなく、妄語や兩舌が好いのもなく、心の端正しいのが本當に好いのである。

そして、彼等のためにこういふ昔話をなされた。

「婆羅門よ、昔、波羅奈國に機惟尼といふ王があつて、七人の美しい娘を持つ

てゐた。ある時、七人の娘は墓場に行き、死屍累々として眼もあてられぬ有様を見て、深く人世の無常を觀じ、一人一人に次の歌を歌ふたのである。

第一女「人も我れも

新衣を着け

香水を塗り

姿をつくつて道をおるく。

しかし、一度死ねば

墓場に捨てられて

虎狼野干の餌となる。

第二女「①瓶の中の②雀は

蓋があるから飛ぶことが出来ぬ

しかし、瓶が破れると

雀は獨り飛んで去く。

第三女「③車に乗つてゆく

途中で、④主は車から下りた。

車はもう動かぬ

主は何處へ去つたのか。

第四女「⑤船に乗つてゆく

岸についたから主は上陸した。

船はもう動かぬ

主は何處へ去つたのか。

第五女「あしこの町には

たくさんな人が住んでゐたのに

近頃はめつきりと淋れた。

みんな何處へ去つたのか。

第六女 「あの人は

今さきまでものをいふたに

もう今は何にもいはぬ

どうしたのだらう。

第七女 「どうしたわけか

主は「家を捨て、出た

誰も守る人がなく

家は日毎に荒れてゆく。

その時、帝釋天は彼等の歌を聞いて墓場に現れ、その歌をたゝへて、一人一人に彼等の願を聞きたゞした。すると、先づ第一女は「⑦妾は根のない枝も葉もない樹の中に生れたう御座います」といふ。つゞいて第二女は「⑧妾は形の

ない陰陽のない處に生れたう御座います。」といひ、第三女は「⑨妾はどんな音響も聞ぬやうな深山に生れたう御座います」と、その希望をいひたてた。

さすがに、帝釋天は辟易して、

「姉さん、もう止めて下さい、私は到底そういう願を叶へてあげることが出来ないから。帝釋や梵天や、そういう神々になることならばとにかく、姉さん達のお願は私共にはよくわからないから。

と逃げるのであつた。彼等は口を揃へて追窮した。

「卿は天界の第一人者であるのに、どうして妾達の願が判らんのですか。卿は車の挽けない耕作の出来ない老牛のやうですね。

帝釋天ははう／＼の體でたち去つた。

その後、彼等は空中の聲を聞いて、迦葉佛の許に詣で、教を受け、^⑩無生法忍を得たのである。

その時、釋尊はこう仰せられた。

「婆羅門よ、こういふ譯で、この王女は身分も高く容姿も美しかつたけれども、その身分や容色を誇るやうなことなく、專一に道を修めたのである。そうであるから、汝等も儚ない夢を見ておらずに、佛の道に入るが宜しい。殊に、婦人は姿態に浮身をやつし嫉妬が強いので、自然男子より多く地獄に墮ちるのであるから、努めく心せねばならぬ。」

摩訶密を初め七人の娘は、佛の敎によつて新生活に入つた。

〔出據〕 佛說七女經。

〔要點〕 虚榮と嫉妬を戒め、肉體美を否定して精神美を説く。

〔字解〕 ①——②瓶、車、船、家は肉體を譬へ、雀、主、は靈魂、實は業に喩ふ。

⑦⑧⑨象徴的に涅槃の境地を説く。

⑩無生無滅(絶待)の法を信認したる境地。

十八 遊女、蓮華

釋尊が王舍城の耆闍崛山に在した時である。この城に蓮華といふ一人の遊女がゐた。色と肉とに荒んだ彼女も、ふと善心が萌して出家を思ひたち、ある日耆闍崛山へ佛を訪ねに出た。その途中、清らかな泉の傍を通つた。彼女は疲れしまゝ、水を飲み、手を洗いで、ふと見れば、妖艶な自分の姿が水鏡にうつてゐる、紺青の髪、青紅の唇、我姿の餘りの美しさに、またしても人の世が戀しくなつた。そうだ、いま尼僧の生活に入ることには餘りに慘酷だ、この呻、この唇、この肌を以て、もつとく男達の血と肉とを吸ひ、香りの高い歡樂の巷にさまようてくれやうと、彼女はもと來た道に歸りかけた。

すると、上手の方から一人の女が來る、その美しさ優しさは、到底蓮華の比ではない、彼女は恍として暫くそこにたつてゐたが、女の近づくのを見て、馴

々しく言葉を加けた。

「姉さん、汝はごこの御方ですか、こんな山路をどうして獨り行かれますの。

「妾はあの街に住むものですよ、妾も大分に疲れましたから、しばらく、あの泉水の傍で休んで、一所に歸りませうか。

二人は泉水のほとりに芝草を敷いて座つた。そして、麗かな野山の景色を眺めながら、種々の物語に時をうつした。その内に、彼の美女はいつしか蓮華の膝を枕として眠つてしまつた。蓮華はつくづくその美しい寝顔に見惚れておつた。すると忽に、ウンと一聲、思ひがけもなく、女はその場で死んだのである。そして、みる／＼内に様子が變り、顔は脹れ上り、齒をむきだし、身には紫色の班點があらはれ、ぞろ／＼と蛆蟲がはい出して、いやな臭が鼻をつくのであつた。蓮華は現前に人生の無常を見て、今更のやうに驚き、さきに自分の姿を見て出家を思ひ止つたことの愚かさをはち、急いで佛の所に詣でたので

ある。

彼女は一座の説法によつて比丘尼の生涯に入ることゝなつた。

〔出處〕 法句譬喻經。

〔要點〕 此經には、死相を現した女を佛の變化身としてあるが、それはどうでもいゝ。歡樂の底には悲哀がひそむ、その悲哀をみつめた者はもうちつとしてゐる、ことが出来ない。

十九 歡びの歌

ある日、釋尊はマサーリ城の捺氏樹園に於て、普明菩薩等のために超日明三昧(禪定の)の法門をお説きなされた。

その時、慧施といふ某長者の娘は、五百の婦人達と一所に釋尊の許に詣で、そのお話を聽聞し、大に感激して佛の道を求むる念を起した。そこで、釋尊にその事を申しあげた、すると、その座にあつた上度といふ比丘は、彼女に對し

てかういふのであつた。
 「慧施よ、婦人は佛に成ることが出来ませぬ。といふのは、婦人には三つの隔と五つの礙があるのです。先づ、三隔といふのは、少い時には父母に隔へられ嫁すれば夫に隔へられ、老をとれば子に隔へられるのである。次に五礙といふのは、一には帝釋に作ることが出来ぬ、なせかといへば、勇猛にして欲が少なければ男となることが出来る、けれど種々な悪を作るからして、女人として帝釋になることが出来ぬ。二には梵天に作ることが出来ぬ、なせかといへば、淨行をつとめて穢なく、四無量心か四禪(四種の禪定)を修むれば梵天になれるけれど、情欲が深いからして、女人としては梵天になることが出来ぬ。三には魔天に作ることが出来ぬ。なせかといへば、十善を行ひ、三寶を敬ひ、二親に孝事し、長老に謙順であれば魔天になれるけれど、輕慢不順にして正教を毀つからして、女人としては魔天になることが出来ぬ。四には輪王に作ることが出来ぬ

なせかといへば、菩薩道を修め、一切の衆生を慈み、三寶と師父に奉へば、輪王になれるけれど、^①八十四の悪を作つて清淨な行がないからして、女人としては輪王に作ることが出来ぬ。五には佛に作ることが出来ぬなせかといへば、菩薩の心を持って一切の衆生を慈み大乘の深義に達すれば佛と作ることが出来るけれど、情欲深くして姿態卑しく、身と口と意と異り、言と念に實がないからして、女人としては佛と作ることが出来ぬのです。
 彼女は問ひ返すやう、
 「尊者よ、かやうに一つ／＼に因果の關係があるならば、この五つは本來別がないのですね。
 「おうきにそうです。
 「然らば、本來別がないのに、どうして別が出来ましたか。
 「それは今いふたやうに因行が違ふからです、すべて浮くも沈むも迷ふも悟る

も、一心が本で因行の關係です。

「然らば、佛に成るべき修行さへすれば佛に成れるので、三界男女の別はないのでせう。」

「おうきにそうです。」

「尊者よ、そうですから、我々婦人でも立派に佛に成れますよ。」

釋尊は彼女の覺悟を證明せられた。

その時、彼女は、忽に身を轉じて男子となり、空中に昇り、また地上に下つて佛の足を禮拜し、忽に無生法忍を證つたのである。その時、同伴せる五百の婦人達は欣然として「歡びの歌」を歌ふた。

今までは

あれは男、これは女と

定まつたものゝやうに謂ふてゐたに

今日は佛さまの恩で

そうでないことを知りました。

六道は幻化のやうなもので

業からできる。

② 本無の眞諦を知らずして

おれがくゝといひつのも

執着するから

汗泥に墮ちる。

三界は假の宿

諸法は皆な夢だ。

み佛よ、加護を垂れて

この定に値ひ

疾く佛道を獲せしめ給へ。

と、歌ひ終るや、彼の婦人達もまた男子に轉じたのである。
釋尊は彼等に成佛の豫言を與へ給ふた。

〔出據〕 佛說超日明三昧經。

〔要點〕 五障(五礙)三從(三隔)の説に對して、本無の理を説く。

〔字解〕①(一)大愛道比丘尼經卷下に詳し。(二)身も心も一切惡なりといふ意にも用ひらる。

②三界六道の別も男女の別も業因の別から起る。業因は我々の修養に依てかへらるゝ、業因がかわれば業果もかへる。されば、何事も本來の區別は無く、本質的に固定したものではない。かくて、男女の別は幻の如く夢の如し。

二十 新 家 庭

ある時、釋尊は舍衛城から二十里餘り離れた長提村の婆私膩迦婆羅門の宅へ御出でになつた。久しぶりの御出だといふので、主人を初め家族の者は一同打

揃ふて佛の一行をお迎へ申した。然るに、さき頃、某の家へ嫁入りをした菴提遮といふ娘は、折りもよし、新夫と共に長者の家へ歸つてゐたのであるが、どうしたわけか、獨り一室に籠つて釋尊をお迎へしなかつたのである。釋尊は之を知つて、婆羅門に、

「家族のものは、皆な私共を迎へましたか、」

とお尋ねなされた。婆羅門は恐縮して何事も申上げなかつた。すると、釋尊は彼の意中を察して、

「ともかく、早く中食の用意をしたが宜しからう、」

と仰せられた。やがて、中食は用意せられて、釋尊を初め主客一同は食卓に就いた。しかし、彼女ばかりはやはり室に籠つて顔を出さなかつたのである。

その時、釋尊はわざと御飯を残して、化人を遣してそれを彼女の室に送らしめられた。彼女は心から佛の御親切に感激してそれを頂いた。そして一心に夫

の歸りを念じたのである。間もなく、彼女の夫は彼女の①淨心力にひかれて室に歸つて来た。彼女は飛びたつ程に歡びながら、

「あなた、ごゆつくりでしたね。只今佛さまがこうして御飯を送つて下さいました、妾はまあ何といふ仕合せものでやうか。……それはとにかく、早く一所に御禮に参りませう、小戒にかゝはつてはおれませぬよ。」

かくして、彼等夫妻は佛の所に詣で、恭しく佛足を禮拜し、懇ろに先頃の御禮を申しあげたのである。

その時、舍利弗は彼等二人をいぶかり見ながら、

「世尊よ、この婦人はどうした婦人で御座いますか、佛から御飯を頂いたと申します。」

「舍利弗よ、これは長者の娘である。」

「左様ですか、どうしてゐたのでせうか。どこからこゝへ参つたのでせうか。」

「自分の室にゐたのである。しかし、夫が不在であつたからして遠慮して出でなかつたのである。」

「世尊よ。この婦人はなせに、この長者の家に生れたのでせうか。又、なせに夫に憚るのでせうか。」

「それは本人に問ふて見るが宜しい。」

舍利弗は彼女に右の因縁を尋ねた。すると、彼女はこう答へるのであつた。

妾は生を悪まないからして

長者の家に生れました。

妾は女の相に執着しないからして

清淨な夫を持ちました。

妾共の家庭は自由であります

しかし、妾は妾の分をおろそかにしませぬ。

妾が妾の分を守つておりますから
さき程、世尊は妾の心を察して御飯をおくつて下さいました。

あなたはこのわけを御存知でないのでせう。
分を守る處に自由があります。

妾は自分の室にゐても

親しくみ佛を拜みます。

あなたは阿羅漢で

いつも世尊のお傍にごさるけれど

み佛を拜むことが出来ないのです。

み佛は肉體から拜むことは出来ません。

やゝもすると

聲聞達は惡魔を見て

み佛のやうに謂ひます

もちろん、それは大きなまちがひであります。

卿はこういふわけを知らないからして

妾をみあやるのです。

舍利弗は彼女の見識に恐縮して、かへす言葉がなかつた。彼女は更に文珠師

利に對して、②具に生と死、常と無常、空と有の一相を辨じたのである。

その時、舍利弗は再び口を開いた。

「姉さん、あなたの見識には恐れ入りました。しかし、あなた程のものがどう

して女の相を離れることが出来ないのですか。

「大徳よ、あなたは男ですか。

「そうですね、私は身(肉體)は男ですけれど、心は男ではありません。

「大徳よ、妾もそうですね、肉體は女ですけれど、心は女ではありません。

「姉さん、しかし、女でないならば、どうして夫の束縛を受けまするか、
「大徳よ、さきに肉體と精神との兩面あることを申しましたでせう、それは肉體に屬すること、妾の精神は常に自由であります。いらん悪口を叩いてはな
りませぬ。」

「いや、悪口を申すのではありませぬ。」

「それは佛さまの前だからでせう。それが悪口です。さもなくとも性の別に囚れてゐる間は、眞實の信は起らないですよ。」

その時、會衆は彼女の爽かな辨説を聞いて、大に悟る所があつた。釋尊はまたその徳を讃へて成佛の豫言を與へ給ふた。

〔出據〕 佛説長者女菴提迦師子吼了義經。

〔要點〕 同じ女子解放の叫でも、この經は、性の別を精神的に扱ふてゐる、舍利弗に對して「卿は男ですか」は面白い。「分を守る所に自由あり」とは、たゞならぬ深い言葉で、新家庭

の様子が偲ばれる。

〔字解〕①純な愛のこゝろ。

②我々は生と死、無常と常住、空、消極と有(積極)といふ風に差別に囚はるゝで苦しむ、能く絶待一相の天地に浸つて、差別を生かさればならぬ。

二十一 尼僧のはじめ

釋尊が①迦毘羅城の尼拘律陀園に在した時である。ある日、②姨母のマハー、ブラヂャバチーは、釋尊の許に詣で、出家を請ふた。その時、釋尊はこう仰せられた。

「マハー、ブラヂャバチーよ、出家は思ひ止つたがよい。若し婦人が出家して教團に入ることゝなれば、教團は自然に亂れて、佛法が衰へるであらうから。マハー、ブラヂャバチーは、同じやうに三度お願いしたけれども、お許しがない

いので、泣く泣くおいとまを申した。釋尊はその後間もなく迦毘羅城を出て、吠舍離城に至り、大林精舎に入らせ給ふた。

さて、マハー、プラチャパチーは、一旦、釋尊から出家を斷念するやうに勧められたけれども、その思ひは益々募るばかりで、今は一刻も猶豫が出来ないこととなつた。そのうへ、同族の貴婦人の間に五百人も出家を願ふ者が出来たので、いよいよ覺悟を定め、一同に丈なす緑の髪を切り落して尼となり、手に木鉢を捧げて素足のまゝ、吠舍離城へと旅立つたのである。彼等は馴れぬ旅路に勞れきつて、息もたれなく、その日の夕方、大林精舎に着いた。阿難尊者が立ち出で、見ると、プラチャパチーを初め澤山な貴婦人達は、變り果てた尼の姿となり、塵と埃を身に浴びて、涙にくれておる。阿難尊者は驚いて、どうしたわけかと尋ねると、夫人は泣きながら、

「家を捨て、佛門に入れて頂きたいために、姿を變へて、こうして遙々参りました、と答へるのである。

阿難尊者はその心を想ひやつて、我れ知らず涙ぐむのであつた。釋尊はひとり點いて、足早に精舎へ入つて、釋尊に事の由を申しあげた。

その時、釋尊はこう仰せられた。

「阿難よ、汝の望みは已めたがよい。若し婦人が教團へ入ることとなれば、丁度、長者の家に男が少くして女が多い時は、その家が衰へるやうに、また、良い田地でも霜や雹がふれば、その收穫を傷めるやうに、教團が荒れて、佛法が衰へるのである。

阿難尊者は申された。

「世尊よ、プラチャパチーは世尊に大恩ある御方ではありませぬか、母後のマ